



やらへども鬼

みんな兎

今は昔……。いずれの御時かありけむ……。
この物語も、どこかで聞いたような、そんな始まりで。

第一章 はじまりは……

—

空には、真夏のお日様が雲ひとつなく、燦燦と憎らしいくらい照っている。

通りを荷車が過ぎて行くと、日に照らされ、からからに乾いた土が、白く埃を舞い上がらせる。

今、市の雑踏を歩きながら、顔を顰め、袖で汗を拭った童がいた。

髪をみづらに結って、色白で整った、なかなか、はしこそうな顔つきの子だ。

ここ、西の市は、盗品なども多く売られてい、出入りする人の種類も様々で……というより、かなり得体の知れない者もうろうろしている所だ。道だけは、他の京中を東西に碁盤の目のごとく走る道と同じく、搦きかためられて、真っ直ぐ延びているけれど、往来を行く人の群れや、両脇に軒を連ねる店も、京の東にある市に比べると、どこか雑多でうす汚れた雰囲気、そのくせ活気はあった。

そんな中をその子はすたすたと歩いていく。

隙がないので、全く問題も起こらず先に行く。傍らには、同じ年頃の女の童。

この子も同様にはしこそうだ。二人とも、両手にしっかりと荷物を抱えている。

「待ってください……。」

後ろの人ごみの方から声が聞こえ、足を止めて、二人は顔を見合わせる。

すると、人ごみをようやく掻き分け、彼らより年かさに見える少年が追いついた。

髪をみづらに結った童が呆れたような顔をしている。

追いついた、少年も、水干を身につけていたが、簡素で、こちらの方が動き易そうなつくりだ。身のこなしこそ、しっかりとしているが、服装から、振り向いた童が主なのだとわかる。

少年が戸惑ったような顔で、訴えている。

「ゆりさま。荷物は、私が持ちます。」

「あなたに持ってもらったら、ここを出る前に、ぜったい、盗まれてしまうからいい。」

「……………」

溜息まじりのゆりの返事が返って来た。ゆり……………。

そう、彼の主の名は、ゆり。男の子のような格好(なり)をしているが、女の子だ。

ゆりは、隣の女の童、これは、れっきとした女の子……と、視線を交わし、面目なげな少年の顔を見てくすりと笑った。

「あと、もう少しで、市を抜ける。そしたら、二人分の荷物を持ってもらうから。」

そう言うと、少年がほっとしているのが分り、ゆりは、にこりとし、また、すたすたと歩き出す。

女の童も、それについて歩き出しざま。

「ぐずぐず、してないで。早くしなさいよ。いつまでも、お嬢様に負担かけてるんじゃないわよ。」
ちょっと、顔を上向き加減ですました表情。そのわりに、瞳は悪戯っぽい。
一番年下の彼女は、背伸びして先輩風を吹かせてみたいのだ。
いかにも、隙をみつけたのが楽しいといった感じだ。
「あ、はい。」
と言ったしりから、彼は・・・。
人に阻まれて、人ごみを抜けるのに苦労している。
時々速度を緩めてやり、ゆりと女の童は、少年が追いついてくるのを待ち、それで、やっと、市を出て、人通りの少ない道に出た。そこで、荷物持ちは交代。
女の童が、はあっと溜息をついた。それでも、足は止めず歩く。
「あ～あ・・・。お嬢様付きで、世話係だけしていればいいと、思ったのになあ。どうして、買出しのような力仕事まで・・・。」
「う～ん。家に人が居つかないから・・・。また、やめちゃったもんね。」
ゆりは、苦笑する。
ゆりの家は、貧乏ではないけれど、使用人が少ない。
新たに雇い入れてもすぐに辞めてしまうのだ。辛うじて何人かずっと、昔からいる者が存在するのだが、年寄りばかりだ。任せておくと、差障りがあるので、市へ行かねばならない時は、ゆりが自ら出向く。
ゆりは、ぼやく女の童の瞳をちょっと覗き込む。
「まとのも、家にいるの嫌になった？私は、市へ皆で行くのは楽しいから好きなんだけれど・・・。辞めないで、お願い。」
すぎるような目。
・・・・・・・・・・。
童装束を身につけて、髪をみづらに結い、すっきりした顔立ちのゆりは、ぽっと見は、なかなか格好良い男の子みたい。
お願いされちゃったわ。と。
何で、お嬢様なのに・・・と思いながらも、まとのが、ぽっと頬を赤くする。
「・・・や、辞めません。もともと、他に行くあてがありませんから。雨水(うすい)も、そうよね。」
まとののは、荷物を抱えて立っている少年を振り返る。あっ・・・そうか、訊くまでもない。
雨水(うすい)は、お嬢様が拾ったんだからどこへも行くわけないか。
いったい、どういう生い立ちなのか、わからないけれど、春先にひどく雨が降ったあとの道で、記憶を失くして、ぼんやりしていたのを助けられたのだ。行くあてがあるはずが無く、そのまま、万年人手不足のお屋敷に雇われることになったのだ。
にこにこと笑い返してくる彼を見て、まとののは聞くまでもないことを聞いてしまったと思う。
雨水(うすい)は、いつも機嫌よく笑っていて、悪い奴ではないが、とても要領が悪い。そのせいで、自分ばかりか主のゆりまで、手伝う羽目になることが多い。
まとののは、にこにこと笑っている雨水(うすい)と、まとのの返事によかったとほけほけ喜んでいる

ゆりを見ながら、私がしっかりしなくちゃ、と、心に誓った。

もう家の辺りまで来ている。

ゆりは見慣れた我が家の築地塀の向うを見やった。

「母上には、変なものばかり拾って来ないように再三、言っているんだけどね。」

ゆりの言葉に、まとののは笑うしかない。

ゆりの住む家は、特殊な事情がある・・・。

ちょうどその時、彼女の視界に入った開いた門から、ころころと小さな丸いものがこちらへ転がって来た。淡い青色をしていて蛍火のように、発光している。

こちらにやって来たそれを、ゆりが手のひらに乗せた。

彼女の口がへの字に曲がり、えい、弾いちゃえっ、と、空いている、片方の手の指で、ぴんと弾く。蛍火は、とたんにぱっ、と、弾けて、跡形も無くなる。

「消してやったわ。」

「いいんですかあ。かわいいとかって、お方さまが拾って来られたやつでしょ。」

「いいの。ほっとくと溜まってくるから。どっかへ出かけちゃって行方不明、ってことで、ね？」

「うわあ・・・みえみえ。」

「どっちにしろ、溜まってくると好かないから、どうせ母上も結局祓ってやることになるんだし、いいわよ。」

「・・・そうですね。あれさえなければ、雇った人が辞めて行くこともないですよね。」

「本当にもう、いくら陰陽師の一門のはしくれの家だからって、あんなわけのわからないもんがうろうろしてたんじゃ、人が怖がって近付かないよ。」

「ばけもの屋敷って、言われてますもんね。」

ゆりの母の父、つまり祖父は、陰陽師だった。

今は、亡くなって、その屋敷は娘であるゆりの母のもので、そこで、魔を祓う能力を受け継いだ母も、時々一族から舞い込む依頼をこなして生活している。

が、かなり変わった性格で、というより幼い頃から、化け物類を見て大きくなったせい、それらが、うろうろしていても平気なのだ。害のない、見た目かわいいものを、（ただし、ゆりに言わせれば首をかしげるようなものも含まれているが）たくさんの化け物類を拾って来る。それらが、屋敷の中をうろうろしているのだ。

人が辞めていく理由はそれで、そればかりか、ご近所からも敬遠されている。

盗賊だって、狙いやしないだろう。

「ほんとに、仕様がな。」

ちっと、舌打ちまでするお嬢様に、さすがに、まとのが注意を促す。

「ゆりさま。いくら何でもそれはお止めください。いちおうお姫さま、なんですから。」

「やっぱり？だめかなあ・・・。」

「駄目。だって、ゆりさまは・・・。」

と、まとのが言いかけた時、道の向うから牛車が近くまでやって来て止まる。

網代車。一見しただけでは、男が乗っているのか、女が乗っているのかわからない。

ゆりと、まとの顔を見合わせる。

牛車の前の御簾が少しだけ捲れて、そこから、標色(はなだいろ)の地色をした直衣の薄い青が覗いて見え、隙間から閉じた扇が、ひょいひょいっと差し招く。

ゆりが近付く。

「これこれ、かわいい女の子が、警護も連れずに歩いていると危ないぞ。」

つぶやきのような声が聞こえた、かと、思うと。

にゅっ、と、出てきたその袖が、ゆりの腕を掴み、さっと、車にひっぱりこまれてしまう。

「わっ！」

「人攫い。追いはぎ、盗賊……」

この一見、何もかもものんびり、優雅に見える、貴族たちの住む都は、実は、犯罪も多い。いいところの子供が、こんなふうにはげはげと歩いていると、白昼堂々と誘拐などということも有り得るぞ。と。

その腕は、ゆりを怖がらせようと、そんなことを言いながら、後ろからぎゅっ、と羽交い絞めにする。

だが、すぐに力を抜いた。

「なんだ。もっと、怖がるかと思ったのに……。」

拍子抜けたような声が、ゆりの耳に届く。

ゆりははじめこそ、手足をばたばたさせてもがいたが、それは力いっぱい後ろに倒れてしまいそうになりそうな、体のバランスを取る為で、すぐに抵抗をやめてしまった。

ぴったり張り付いた背中に人の温かみを感じながら、不機嫌に眉を寄せる。

暑苦しい……。この蒸し暑い都の夏に。

「父上……。もうちょっとマシな現われ方して下さい。」

「やれやれ、かわいい姫がのほほんと、道を歩いていたのでは危ないから、あんまり、無用心なので、脅かすつもりだったのだが、すぐに気付いたか。まあ、親だもの、声でわかるか。」

顔を確認している暇は、なかった、はずだ。

「違うわよ。警護の供の者も、牛飼い童の顔も見覚えがあるし、女の子、って言ったでしょ。どこの誰がこの格好を見て女の子だと、すぐにわかるんです？」

言っていて、ちょっと悲しくなるが、ゆりの造作は、整ってはいるが女の子の甘さや華やかさといったものから遠く、その為、こんなふうには水干を身につけていると、似合っていて、めったに女の子だと見破られることは少ない。まあ、どこの世界に、いいところのお嬢様が道端をのんきに歩いているのだ、という基本的な常識も手伝ってはいるが……。それに、良いものは着ているが、身のこなしも、すばやくて、せいぜい、良い家のお屋敷勤めの子、ぐらいにしか見えないだろう。ぽっちゃんにすら、見えない。どこが、危ないと言うのです？との指摘に、ゆりの父はぐっと二の句が告げられなかった。

「ところで、何か用事があったのですか？」

「どうじゃ、久しぶりに父の屋敷に……。」

言いかけて、外が騒がしいので、そちらに注意がそれる。人のわめく声に、ゆりがはっと気付き、車の前の御簾をばっ、と、跳ね上げた。

「雨水(うすい)。」

雨水(うすい)は、警護のごつい、武者に、捕まえられている。二の腕を捻られて、身動き出来なくて顔を顰めていたが、ゆりの姿をみとめると、何とか逃げ出そうと、暴れる。

「放せ！ゆりさまをどうするつもりだ。」

「何だ。まだ、暴れる元気があるのか。かなり、きつく肩を打ったと思ったのだが。根性あるじゃないか、ぼうず。」

「雨水(うすい)だ。狼藉者。ゆりさまを帰せ。」

彼は腕を痛めそうなのにも構わず、そのままこちらへ走りようとしている。ゆりは、一瞬ぼかん、として、すぐに、慌てて制止する。

「その子に乱暴しないで。放してあげて。」

ゆりの声に武士の腕を捻っていた、力が少し緩み、その隙をついて、雨水(うすい)がするりと逃れ、そのままゆりの方へ走りだす。

こちらへやって来ると、ゆりの体を抱いて車から降ろす。

一瞬、顔を顰めたのは、まだ、雨水(うすい)の腕がしびれているからだ。それでも、ゆりを背に庇うときっと顔を上げて、相手を睨む。

雨水(うすい)の視線の先には、標色の直衣の人物が、ゆったりと、車の中で座っている。手に持った、すぼめたままの、扇を口元に近付け、わずかに眉を寄せる。

「こんなのが、警護では、お話にもならないな。」

「お言葉ですが、こんなところを目撃されて困るのは、あなたのほうだ。見たところ、盗賊の仮の姿には見えず、身分のある方と見受けられます。権門の家とは言えませんが、白昼堂々、良い家の姫君を攫ったと、噂が広まったら、どうなることか、考えてみればいい。」

「だが、このまま斬って捨て、黙らせるということも出来るが。」

「無駄でしょう。武者と争う前に、もう一人の連れに門の中に走って、中へ知らせて来いと言ってありますから、私が斬られても、事実は顕かに……。えっ？何で。」

門の中へ逃げ込むように、言ったはずの、まどのが。

すぐそばに来て、ちょいちょい、と、両手を広げた雨水(うすい)の袖をひっばっている。

雨水(うすい)が目を見張る。

そのようすを見て、雨水(うすい)と対峙していた直衣の男がにやっ、と笑う。

「さて・・・まだ、わからぬか。頭は悪くないようだが。」

その言葉と、まどなの、様子。えっ？えっ？と、二度ほど、頭の中で、繰り返し、状況をほぼ、推測する雨水(うすい)。知り合いだったのか……。だとしたら、随分親しい仲だ。いったい……。

戸惑う雨水(うすい)の背中で、ゆりが、ぱちぱちと瞬きをした。

「びっくりした。いつも、とろとろしてる雨水(うすい)が、こんな行動に出るなんて……。」

「ゆりさま。」

「いいよ。手をおろしなさい。肩まだ、痛いでしょ？」

言われたとおりにする雨水(うすい)。その耳に、父だから、大丈夫、と。ゆりの言葉が届く。

「！」

びっくりした後は、平謝りだ。

それも、ゆりにすぐに止めてもらって、雨水(うすい)はショックが隠せない。

「仕方ないわよね。雨水(うすい)は、知らないのだから。まとののは、もう長いし、たまたま、知ってるだけだもんね。それに、別れた妻の家のそばをうろうろしている男なんて、不審者には違いないんだから。父上が悪いのよ。」

「おいおい。なんて人聞きの悪い。別れたわけじゃない。たまにしか、会えないだけだ。」

「ああ、・・・はい。母上が忙しいもんね。」

めったにこの屋敷にやって来ないのは他にも理由があるが・・・。ちらりと事情を知らない雨水(うすい)を見るが、ここで説明するわけにも行かない。ゆりは、父がここへやって来た理由を聞く。もっとも、母のもとに置いておくとだんだん、姫という定義から程遠くなっていくので、何かと、理由をつけてはゆりを自分の屋敷に呼び寄せるが、大抵は使いのものがやって来る。

「ゆりよ。相変わらず、この屋敷は年寄りばかりか・・・？」

娘が頷くと、父は、う～ん、と唸った。

実は、今、都で適齢期の姫が攫われる事件が相次いでいる。

婿を迎えるには少し早い気がするが、ゆりも、一応、裳儀はすませた年頃なので、心配になった。この家は、使用人が少なく、特に男手が欠けていて、屋敷は力のない年寄りばかりだと、思い出した。それに、今は、ゆりの母が家を空けていることも知っている。思わぬところで、彼女と出くわしたからだ。宮中で姿を見た時は、さすがに、目を疑ったが、彼女の仕事は特殊で、時々そんなこともあるから、まあ、不思議はないと思ったのだが、長くかかりそうなので、留守番をしているはずの娘のことが気がかりになったのだ。

「心配してくれたのね。あのね・・・まとのや雨水(うすい)も連れて行っていい？」

このばけもの屋敷に入る勇気のある奴は少ないと思うけれど・・・と、内心、思っていたが、ゆりは、二人の同行を認めさせると父親の屋敷に遊びに行くことにした。

背の高い築地塀、といわれる塀に囲まれた、屋敷。広い敷地には、池や、庭、建物の傍を巡っていく小さな流れの鑓水(やりみず)、庭は、見る場所によって趣の異なり、手入れの行き届いたもの、そこに、桧皮葺きといわれる屋根のついた建物が、点在していた。個々の建物を行き来する為の廊下が巡っている、何てことない、貴族の一般的なお屋敷だが、敷地の広さや、建物の数も、まず、大きい部類に入る屋敷だ。

東と西、主殿である南、北に建物が存在するお屋敷の、西の対。この家は客人が、東から出入りする、そこから遠い西の奥まった静なところにゆりはいた。

滞在する時は、いつもここだ。

手には、日に翳せば、きらきらと輝く玻璃の器を持って、座っている。

几帳は、この部屋にちゃんと存在するけれど、その影に隠れるわけでもなく、部屋と廊下を隔てる御簾さえも巻き上げて、端かに座り、ゆりは非常に姫君らしくなく、座っている。とはいっても、大きな庭に囲まれて、彼女の居室のあたりは、外の人の目にふれることはないが。

さきほど、ここの女房が持ってきた削り氷を、まとのと雨水(うすい)と一緒に食べている。

さっきから、まののが一人、きゃっきゃつ、と、はしゃいで、おしゃべりしていた。

ぼおっと、あたりを見回している雨水(うすい)を見て、肘でとん、と、腕をつつく。

「ゆりさまが、大納言家の姫君だったなんて・・・。その・・・私が、上にあげてもらっても、よかったですか？」

と言ったのは、ここの家でいうと、雨水(うすい)の立場は雑色でしかなく、普通は姫君の部屋へ上がりこむことなど出来ないものだから。あまつさえ、おやつ削り氷も出してもらっている。氷を削って、甘葛という甘いシロップをかけた非常に高価なおやつだ。

「いいのよ。いつも二人には苦勞をかけているから。それより、早く食べないと溶けちゃうよ？」

促されて、雨水(うすい)も食べ始める。

匙でつつくと、しゃくしゃくと音を立てる氷は、口の中に入れると、冷たい。

ほんの束の間、風もない、京の真夏の蒸し暑さを和らげてくれる。

ひんやり感を味わいながらも、雨水(うすい)は、腑に落ちない顔でゆりを見ている。

「その・・・こちらにおられる北の方さまは、ゆりさまのことを・・・。」

言い難くそうにしている。

「あら、もしかして、私がいびられるとか心配してくれたの？ここは、父上の家で、女主人はいないから。と言っても、いくつか通う家はあるんじゃないかって、母上が言っていたけど・・・。」

言いながら、彼女は首を巡らして、廊下の角のほうを向く。

人が渡って来る気配が伝わって来て、廂の廊下に影がさした。

「それは、父上が聞いたら、嘆かれるな。」

ゆりの言葉が聞こえていたのだ。身のこなしも洗練された公達が近付いてきた。

「時貞兄上。」

ゆりが、にこっ、と、笑う。

「やあ、久しぶり、ゆり姫。相変わらず、お転婆のようだな。」

童子の着る水干を身につけたままのゆりを見て言う。だが、それでも時貞は、めくじらをたてているわけでもないのだ。目を細めて、かわいいものを愛でる表情をしていた。

兄といったが、実際には、従兄妹だ。ゆりの、二人いる伯父のうちの下の伯父の子。時貞は、兄弟のなかでも劣り腹といわれる子で、母も早くに亡くし、跡継ぎがないゆりの父に引き取られたのだ。

時貞は、広げた扇で口元を上品にかくし、くすくすと悪戯っぽい笑いをもらす。

「ゆり姫の母上ひとすじの、父上が聞いたら、しばらく立ち直れないかもしれないな。並み居る縁談を断り続けて、表向きは妻と呼べるものがないくらいなのだから……。なにせ、家筋だけはよくて、引く手数多なのをかわし続けたのだから、並大抵の努力ではないだろう。」

「母上への愛ゆえにとか、言わないでね。半分は、面倒なだけじゃないの？」

この時代、男が女のもとに通って結婚が成り立つ。だから、好みの女を選べば良い様なものだが、実際にはそういうわけにもいかない。女の実家が、男の装束や生活を面倒みるというのが一般的だから、出来るだけ裕福な家の娘を選びたがる。身分が低くても、裕福な受領の娘だとか、権門につながるのある娘とか……。一時の恋愛感情だけでは長くは続かない場合が多い。ゆりの父は、そうする必要もない家に生まれたが、家の格式に見合うだけの妻となると、深窓の姫君となる。彼女たちとお付き合いしようと思うと、まず、歌や文を送って、それも何度目かで、やっと、代筆の返事ぐらいが来て、交際の前段階だ。それからもっと進んで、家を訪れることが出来たとしても、最初は立ち話、あるいは、縁側に腰掛けて、外から、御簾ごしにお話するだけ。うんと高い身分の姫君だとご本人の声は直接聞けず、お付の女房が姫君の言葉を伝えるのだ。そうしながら、男も女も互いに相手の人となりを探りあうのだろうが、そんな感じで段階を経て、いざ姫君とご対面となった時、思ったのと違うなんてこともあるのだ。もちろん、相手の親から、これぞ婿がねと、それらをすつとばして、結婚ということもあるけれど、それはそれで引くに引けない状況だ。

ゆりは、ずけずけと言った。

「おや。手厳しいね。父上は、隙あらば、ゆり姫をこちらに呼び寄せようと一生懸命なのに……。」

兄の言葉に、ゆりはちょっと小首を傾げるような仕草をした。

彼女はみづらという髪のかたち、耳の横で円い輪っかをふたつ作って結って、まだ長さの残る髪を背に垂らしている。彼女が、首を傾けると、その垂らしている髪が揺れて、さらっと水干の背で小さな音を立てた。

「それもね。迷惑な話だわ。自分たちのことを棚にあげて、娘には世間並みに良い婿を、って、考えてるなんて。」

「確かにね。君に姫君然と過ごし、大人しく人の奥方が出来るなんて思わないけど。母君のお手伝いも出来なくなるしね。」

「そうそう。そのことも世間様に知れたら、物の怪つきの姫とかなんとか、陰口たたかれるに違いな
いんだから。」

あまり身分違いでも、世間的には認められない。ゆりの祖父は、町の陰陽師と違って、正式に陰陽
寮に所属する位階も持っている貴族のはしくれだった。陰陽師は、あくまで天文や、占いなどが本職
、知識を生かしたもので、内容も科学的な知識とさえ言えるものまで含まれるもので、普通の人か
思っているものと違う。けれど、呪術、怨霊、呪詛・・陰陽師ときいて想像する言葉ゆえに、それと繋
がりがあるということなど、あまり公にしたくないことだ。ゆりの母が、祖父の本職でない部分を引
き継いでいることもあって、妙な色目でみられるのも不憫だと、父とゆりの母とのことは内緒の関
係だ。ゆりは、町の小路の女に生ませた娘で、それでも大納言から特別鍾愛されるがゆえに彼の用意
した別邸で、生母と共にひっそり暮らしていることになっている。

事実を知っている人間は、この屋敷でも少ない。

だから、こっちに来ると言動にも多少は、気を使わなければならないのだが・・。

彼女を取り巻く特殊な事情をどう思っているのか、時貞は曖昧に微笑して見せただけで、さらりと
話題を変える。

「そうそう、その物の怪つきのことでゆり姫の意見を聞きたいんだが・・。」

正確にいうと、怪異に見舞われた姫の話だ。

毎夜、どこからともなく聞こえて来る笛の音。

それだけなら、どこかの公達がそぞろ歩きのついでに、風流に奏でているのかと思われるが、それ
に呼応するかのように、箏の音が、それも塗籠(ぬりごめ)にしまわれて誰もいない箏の部屋から聞こ
えて来るのだと言う。

屋敷の者が、念のため見張りをしていたが、誰も入った形跡はない。

時を同じくして、姫君が臥せることが多くなった。皆は、物の怪の仕業で、悪い気にあつたつせ
いではないかと噂しているのだそうだ。

知り合いから聞いた話、だと、時貞は、言った。

話を聞き終わって、ゆりは目をくるくるとさせる。

「ねえ、兄上。その知り合いが姫君なのじゃ、ない？」

「う〜ん、惜しい。その家敷に知り合いがいるけれど、姫君じゃないよ。」

「?まあ、詮索しても意味ないか。・・・その箏を見せて貰うってことが出来ないかしら。笛は、十
中八九、人の仕業だと思うけど、確かめてみないと・・・。でも、いきなり訪ねていくわけにもいか
ないわよね。」

「出来ないこともないかな・・。」

時貞は、ほとんど即答に近い形で、ゆりに姫らしい格好をしてついて来るように言った。

ゆりが、支度に手間取っている間、時貞はこの屋敷の別の対にある、自分の部屋へ行き、どこかに使いを走らせていた。

ゆりは、まとの一人では着替えを用意することも出来ないので、他の女房たちをよびに行かせる。ぽつんと取り残された雨水(うすい)が、聞く。

「兄上とご一緒なら、私がお供することはありませんよね。」

時貞の供がいるので、雨水(うすい)の出る幕はない。

「そうね。父上にしばらく滞在するって約束しちゃったし、こっちに戻って来るつもりだから、まとのと一緒にこっちで待っていて。」

「あの、それならお願いが・・・。」

「何？」

「ここに来る前に、ゆりさまの父上のお供をしていた武者のところで、働いていてもいいですか？」

いざという時の身のこなしを身につけたいのだと言った。

ゆりを守るどころか、簡単に腕を捻られたことが悔しいらしい。

「それなら、私から、頼んでおくわ。でも、別に、警護の真似なんかしなくていいのよ？」

「いいえ。そういうわけには行きません。拾っていただいた恩があります。」

いつもは、にこにこしていて、とろとろして見える雨水(うすい)が、背筋をのぼして座っている。まだ、長い髪をひとつに結わえて水干の背に垂らし、烏帽子も被っていない童形、どことなく幼さの抜けない顔なのに、大人びた目をしている。

こんなふうに住まいを正していると、なんとなくきりっとして見えるから、不思議だ。

ゆりは、ちょっと考えてから、やがて、こくと頷いた。

「そっか。雨水(うすい)はそんなふうを考えるのね。」

ゆりは、承諾し、そこへ、ちょうど、まとのが人を連れて戻って来た。それを潮に雨水(うすい)は、退っていった。まとのが、張り切って、女房たちの手伝いをしている。

みづらに結っていた髪を解く。ゆりの背に艶やかな黒髪が広がる。それから、一番下着にあたる白い小袖を着て、濃きの袴(未婚の女子が身に着ける。巫女さんのような緋の袴は結婚した女性の身につけるもの)を身につけ、順に衣を重ねるのだが、真夏なのであまり沢山は重ねない。下の色が透ける薄い衣を何枚か重ねただけだ。その背にながれる黒髪をきれいに透かして、最後にほんのちょっと、お化粧をして終わりだ。

その場を仕切っていた女房が、檜(ひ)扇(おうぎ)をゆりに手渡す。紫野という女房だ。ここにいる間は、いつも彼女がゆりにつくことになっている。

紫野がゆりに檜扇を持たせながら、支度の出来栄えを確かめて、ゆっくりと微笑しながらいう。

「あら、姫さま。そのように唇をなめないでくださいませ。慣れないから、少し気持ち悪いかもしれませんが、はげてしまいますからね。そんなに濃く化粧を施してありませんから、少しくらい、ゆり姫様らしく表情をおつくりになっても大丈夫にはしてありますよ。」

「ありがとう。それは助かるわ。」

ゆりが、ほっと安心しながら答える。化粧が崩れないように気を使うなど、大変な徒労のように感じる。

「時貞さまから、姫さまが、和歌の上手といわれるお方さまのところへ、お勉強に行かれるのだと、伺いました。ゆり姫さまらしさを損なわないよう、あまり仰々しく飾り立てないようにとも……。あちらにも、同じ年頃の姫がいらっしゃるそうですわ。仲良くなれるとよろしいですわね。」

「……………そうね。」

和歌と聞いて、舌打ちしそうになるのを堪え、微妙な顔をしてる彼女を、まとのが笑いをこらえてみている。ゆりが、口を開きかけた時、頃合を見計らって迎えに来た時貞が姿を見せ、まとのや紫野に見送られ、家を出た。

牛車に揺られ、相手のお屋敷につくまで、それほど時間はかからなかった。

着いたお屋敷で、案内の女房について行く。

ゆりは、扇で顔を隠しながらも、通り過ぎる屋敷内をすどく見つめて、観察していた。

通された室には、几帳が立てかけてある奥から、重ねた衣装の裾や袖が見えている。

香りが舞い飛んだ。ゆりが、そう思っていると、几帳の向こうで身動きする気配がした。

続いて、落ち着いた声が聞こえ、時貞とその婦人の会話がしばらく続く。訪問時の挨拶に加え、「この間、どこそこの知り合いが、文を送ってきましたの。石山詣でに出た折に、詠んだ歌で良いものがありましたわ……。」「う～ん、なかなか……。近江といえば湖、そう言えば、こんな歌を聞きました……。」とか、和歌の話らしきものが聞こえてくるが、興味のない、ゆりは、ほとんど聞き流して、まったく違う方向の庭に目をやっていた。

「それで、こちらが、妹姫なのね。」

急に、話をふられ、慌てて、意識をこちらに向けたゆり。

「突然迷惑かと思ったのですが、ついて来ると聞かなくて……。何分、まだ幼くて、わがままいっぱいに育ったものですから……。」

「あらあら、かわいくて、兄上さまが甘やかしているのではないの？大納言さまも、非常に大事にされていると聞きますよ。ねえ、ゆり姫さまとおっしゃったかしら、家にも、少し年上ですけど、姫がおりますのよ。どうかしら、今から姫とお会いにならない？」

几帳に遮られて、顔は見えないが相手の探るような目を感じる。

ゆりが、ちらりと横目で時貞を見て、通されたまわりの様子を見て、几帳の向こうの女主人を見る。廂の間ではなくて、こんな間近に通されるわけか……。なるほどね、心～ん。妹の視線を感じた時貞の扇に隠れた口元が一瞬、悪戯に跳ね上がる。

その反応にゆりは、一瞬目を丸くするが。

やれやれ……。もちろんそれが目的で来たんですよ、と。

お方様へ、心のなかでつつこみつ、ゆりはやおら、顔を隠していた檜扇を広げたまま膝に乗せ
たかっこうで、前のめりになって返事をした。淑女らしさを、うっかり、忘れた、いかにも子供っぽ
いしぐさが、相手の警戒心を解いた。

「まあ、同じ年頃のお友達？うれしいわ。ああ・・・でも、どうしましょう、お兄様。私、お歌は得意
ではないの。こちらの姫さまに嫌われたら・・・。箏なら、少しはましなんだけど。」

直球勝負に、時貞は、一瞬ぎよっとなったが、すぐに微苦笑を浮かべてとりなす。

「どうも、子供の言うことは・・・遠慮を知らない。こちらの事情を存知あげないのです。気を悪く
なさらないで下さい。」

「あら、まあ。構いませんことよ。そうねえ、私も姫も、箏の音を聞くのは好きですわ。けれども、
今は少し障りがあるの。」

お方さまは、事情を話し始めた。身動きもせず、くいいるように話に聞きいつているゆりを、どう
するつもりだ、と、時貞が成り行きを見ている。

お方さまの話聞き終えて、ゆりがほおっ、と、息を吐く。

「笛の音に、呼応するように箏の音・・・。とても、美しい音色がするのですね？」

「ええ。」

「その箏は、笛の音に恋をしているのかしら・・・。」

きらきらと、夢を見るような目をしているゆり。内心では、我ながら寒っ、と思っている。

子供らしい答えに、お方さまがつい笑いをもらした。

「まあ、かわいらしい想像ね。」

声に温かみが宿っているから、馬鹿にしているわけではないらしい。少し面白がるような響きがあ
った。

「だって。悪いものだったら、そんな美しい音色は出せないと思いますもの。見てみたいわあ。ねえ
、お方さま、駄目ですか？」

にこっ、と。笑う。

「そうねえ。それならば、ここへ運ばせてみようかしら。」

とうとう、お方さまの許可を取り付けた。

箏が運ばれて来て、室の中央に置かれる。

「普通のお箏ですわねえ・・・。」

言いながら、ゆりは箏に寄って行って、弦に触れる。

「あら、ゆり姫、お待ちになって。」

お方さまの止める声も間に合わなかった。けれど、何事も起こらない。

「・・・ゆり姫、具合が悪くならない？」

心配そうに訊ねる声。ゆりが、元気よく首を横に振る。

「無作法をいたしました。非礼のお詫びに、一曲、お聞かせ申し上げますわ。どうぞ、お兄様とお
二人、お聞きになっていて下さいまし。」

控えている女房たちに、箏を端に寄せてもらって弾き始める。

静かに音が弾き出される。やがて、豊かな音色で室は満たされた。高く低く、心地よい音色が、屋敷中に満ちて、明るい光りが満ちるようだ。

しばし、誰もが手を止めて聞き入る。

演奏が終わると、聞いていた者の顔が明るく輝いた。

「心地よい音色に、何やら先日来のもの思いが晴れるような気がしますわ。ありがとうございます。」

お方さまが、晴れやかな声で言った。

牛車に揺られて帰る、帰り道。

同乗する時貞が、頃合を見計らって訊いてくる。

「そろそろ、何がわかったのか、聞かせてくれないかい。ずいぶん、姫君の部屋で楽しそうに話していたじゃないか。」

あれから、ゆりはあの屋敷の姫君とも顔を合わせていた。

「別に……。兄上のお邪魔だろうと思ったから、あちらに長居してただけよ。なんてね……。」

じっと見つめるゆりの視線を受け止めても、時貞は、涼しい顔だ。

「ねえ。兄上にとって、あのお方さまって、大事な方よね。」

「だったら、どうだ。答えにくいということか？まさか、彼女が怪異の原因とか言うのじゃ、ないだろうね。」

ゆりが、首を横に振る。

「それは……。まだ、わからないわ。」

「わからない。」

時貞が首を捻る。

「とりあえず、怪異が起こらないようにはしてきました。起こらなくなって、どなたがお困りになるのか、あるいはがっかりなさるのか、はわかりません。」

「がっかりということは、嫌がらせということか。困るというのは？」

「……。兄上、何だか尋問みたいになってきたけれど？」

いぶかしげな顔のゆり。時貞の口の端が、ほんの少しあがる。微笑しているだけなのだが、こうなると何を考えているのか、わからない。何か他に真意がありそうだが、切り口を変えて訊いてみるかどうか、迷う。

いいや、もう、どうでも。

心の中でつぶやき、ゆりは、とすっ、と、後ろの牛車の壁にもたれる。

ごそごそと、懐に隠してあった、白い細長い紙切れを出した。

時貞にも、よく見えるようにひらひらと掲げて見せる。文字らしいものが書かれている。

ぱしっ、その紙を細い指がそれに似合わぬ力強さで、弾く。

時貞が、瞬きをする。

「箏の背面に貼ってあったの。こっそり剥がすのに苦労したわ。箏が、ひとりでに鳴ってたのは、これ。笛に呼応するようになってたの。笛の方にも仕掛けがあると思うけど、捕らえてみないと、駄目ね。」

「その符を張ったのは、やはり内部のものか……。」

「それも、女ね。」

「？」

箏の置いてある場所へ、目立たず近づけるとなると、限られてくる。はじめ、箏は姫の部屋に置い

てあった。

日常練習によく使われていたからだ。ひとりでに、笛の音に呼応するようになって、気味悪くなって、箏は、出入りのしにくい塗籠(ぬりごめ)に移動させられた。聞き出した事実を告げる。「嫌がらせでなければ、笛に呼応するのは、何らかの合図、だと思うの。だから、鳴らせなくなって、考えた末にこんなものを張ったんだわ。最初はやっぱり、人が弾いていたのよ。目的は、確かめてみないとわからないわ。」

「目的……。盗賊の手先が雇い人に混じっているかもしれないということは……。だが。」
新しく雇われた者はなく、年頃の姫君がいるので雇い入れる時も身元はきちんと確認されるはずだ。女主人は、若い公達との恋の噂など、いくつになっても華やかな話題に事欠かない女だが、邸内のことはしっかりと管理している。

その可能性は低いな……。と、時貞が呟いたのを、ゆりは不思議そうに見ている。「女所帯では、さぞかし不安だろうからね。合図だというなら、内緒の恋人を引き入れる為ということも考えられるが、あの方なら、わざわざ、そんな目立つことはなさらないよ。」

「兄上と、お方さまって……。」
「ゆり姫の勘違い。時々、ご機嫌うかがいに訪ねる程度の仲さ。あの方は、歌人としても名高く、あちこち交際範囲が広いからね。思わぬ情報網を持っている。ゆかしい方だがね。」

本当のところは、互いに割り切った仲なのだが、さすがにそれは口にせず、時貞はゆりの疑問を封じた。ぽんぽんと、子供にするようにゆりの頭を撫でる。

「ふうん。そういえば兄上って、右近衛府の少将だっけ。だったら、仕事柄気になったというわけでもないよね。……。どうしても、箏の音が必要なら、また、慌ててこの符を貰いに行く者がいるのじゃないかしら。」

左右ともに近衛府は、内裏のうちの警備をする役割だ。武官であり、厳しく誰訊することもあろうし、つい口調がそうってしまったのだろうか？ゆりは、そう考えた。

家に帰りつき、車から降りるゆりを、支えてやりながら、時貞が爽やかな笑顔を浮かべて言う。「ありがとう、参考になったよ。……。推測だが。箏が鳴らなくて困るのは姫君だ。実は、今、尚侍という姫の父君の意向があるんだ。それとなく伝えておくが、あちらの対面というものがあるからね。ゆり姫も、これ以上は詮索してはいけないよ。」

これ以上は、関わらなくていいよと言っているのだ。
ゆりは、それに答えて、うんと頷いた。

西の対の自室に一人落ち着いてから、ゆりは、まだ持っていた符を出して、見つめる。
やっぱり、見たことあるよね、と、つぶやく。彼女の知っている字とよく似ている……。
ちょうど、まとのが室の灯りを点けにやって来た。

「何ですか、それ。ここにいても、お仕事していいんですか？」
まとのが灯を点しながら、聞く。

「ううん、依頼じゃないの。まだ、疑問が残ってるだけなの……。う～ん。」
言いながら、ゆりは手に持つ符と、まとのの点けた灯りを交互に見ている。場所は、だいたい、わ

かる。暇つぶしに、確かめに行ってみるか、決めて。

「まとの。一人で寂しいから、今夜はこの部屋で一緒に寝てね。」

「……………」

まののが一瞬目を見張り、固まる。はあ・っ、と、溜息をついて、応じる。

「夜中に出歩くと危ないですよ。」

「それ、普通の姫に言う言葉じゃない？」

「普通の姫君は、そもそも、外出さえなさりません。そういう発想さえないでしょう。なるべく、早く帰って来て下さいね。朝になったら、誤魔化しが利きませんよ。」

「は〜い。」

「やれやれ、せっかくお姫様を飾り立てて、仕える私の夢が……………」

「今度、付き合っただげるわよ。」

うふふ・々と、楽しそうに、手に持っている符を灯火に近づける。

じゅ・っ、と。白い紙に灯がついて燃えて、灰になる。

あちらは、怪我してないといいけど。と、呟く。

術者の術が破れると、それが本人に跳ね返って、痛い目にあうこともあるのだ。

ゆりは、ほんの少しだけ心配した。

あとは、暗くなるのを待つのみ。ごろりと、そのへんで横になって、仮眠をとろうとするゆりを、まののが、奥の御簾の向こうの寝間に設えた、内側へ追い立てる。

「ここは、紫野さんと私が来るだけじゃないんですよ。少しは、姫君らしくなさって下さい。ほら、中へ入る。」

ゆりが、中へ入ると、まののも準備を整える為、一旦部屋をさがっていく。なんだかんだ、言っても、阿吽の呼吸で成り立つ、良い主従なのだ。

ゆっくりと暮れていく真夏の夜を待つ。

ぬるい色合いの闇が立ち込めている夏の夜。篝火が炊かれているとはいえ、さすがに庭は、黒々と広がっているのが伺えるばかりだ。

時貞は、主殿の廊下から、室にいる大納言に声をかける。

「父上。お呼びと伺いましたが・・・。」

室に入ると、大納言が文机に向かっている。顔をあげた。

「書見の最中でしたか。構いませんか？」

「構わん。呼びつけたのだから。・・・日記だ。今朝はつける間がなくてな。」

日記は朝、前日の出来事を記すものだが、今朝はその間が取れなかった。日記といっても、内容はその日見聞きした公的な出来事の日誌だろうか。あまり私的感想などは書かず、漢文で簡潔に書かれたもので、当時の貴族男性の日課だ。

すでに、筆は置かれ、文机の上には、墨を乾かす為に、広げられた紙がおかれているばかりだ。大納言は、文机を脇へどけて、時貞と向き合う。

「今日は、ゆりを連れてどこやら、出かけていたとか。」

「はい。女流歌人としても有名な、正親町(おおぎまち)のお方のところへ。ちょうど、同じくらいの年頃の姫もいまして、ゆり姫の友達にもいいかと・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

てっきり連れ出したことを叱られるか、と、思った。時貞が、頭を下げようとする、そのまえに大納言が首を横に振る。ほんの少し、面倒くさそうだ。

「それで、何かわかったのか。」

時貞が軽く目を見張る。

「お前が連れ出したのだ。危険はない程度には、配慮しておろう。叱るつもりで呼んだのではない。ゆりも、あまり姫らしい生活を強要すると、さっさと帰ってしまいかねんからな。」

「・・・そうですね。」

時貞が、ゆりの見つけた、符のことを話す。

けれど、一連の事件とは、関連がなさそうだと推量した。

都の妙齢の姫君が攫われる事件。

それは、賊の侵入や、内部に入り込んだ者の仕業によってというものではなかった。側仕えの者たちの目の前で、こつぜんとならぬように消えるというものだ。

箏の上手、字の上手・・・と聞こえる優秀な姫君たちは、皆その得意とする手習いの最中でかき消える。ある、美しいと評判の姫君は、髪を櫛けづられている最中に、女房たちの目の前で消えた。特徴といえば、そのくらいか。だとすれば、今日の件はそれとは関係がないかもしれない。その姫は、教養程度には弾くのかもしれないが、とりたてて上手いと噂を聞いたこともない。

大納言が、頷きつつも、まだ、何か考えている。

「箏の件は、そうかもしれないが、まだわからんな。一応后がねにもなる姫には違いあるまい。」

「父上は、后候補の姫が狙われているとお考えなのですか。」

「いや、話の出ていなかった者も含まれる。そうとばかりも言えまいが、それが可能な範囲の娘ばかりだ。」

「そこまで、わかっているのなら・・・。」

大納言が首を横に振る。

「相変わらず、皆、公に、届出が出ていない。帰って来ることを諦めていないなら、外聞の悪い話は広めたくはなからう。」

隠しても、大きな家ほど、人の出入りがある。

噂を、隠しきれぬほどのものではあるまいに。

「ばかばかしい。当の本人の価値が下がるわけでもないのに・・・。」

「そう考える人間は少ないということだ。・・・消えた事情が事情なので、それぞれが独自に懇意の陰陽師や祈祷師などに、頼んでいるようだ。しかし、こうまで、似た事件が続けば、同じ犯人の仕業だろう。そこから、行方を掴んだほうが早い気がするが。」

といっても、実際動くのは、検非違使だ。だが、世を騒がす噂や、事件というのは、今後どんなふうに転がるかわからない。ある程度、ことの真意を把握しておいた方が好い。

「今のところ、検非違使も手は出せない、ということですね。」

「そうだな。だが、今後次第では、こっちも忙しくなるかもしれん。」

大納言は、右近衛府の長を兼ねている。これは、時貞たちの上司としての言葉といえようか。今のところその事件が、内裏のうちの警備の問題に発展しそうなことはないが、実のところ、今、宮中も別の問題でまったく平和というわけではない。この事件が、それに絡んでくることがないと好いが、と思う。「で、誰に頼まれて、動いているんだ？」と、大納言の目が、問う。

時貞の生真面目そうな顔を見て、彼はちょっと目を細めて笑う。

それから、首を横に振り。

「まあ、いいか・・・。」

大納言が話しを打ち切って、寛いだ表情になる。

その時、時貞が、耳をちょっとそばだてた。微かに、流れてくる物音を確かめようとする。耳を澄ますでもなく、箏の音が聞こえてくる。

「それにしても、ゆり姫があんなに箏が上手とは思いませんでした。あまり女の子らしいところは見ることがないので、実は、今日、本当に弾けるのかと内心心配したくらいで・・・。」

「ああ。箏や楽器類は、陽の気に通じるからな。小さい頃から、それで、練習を欠かさないんだ。あれは、母親の後を継ぐつもりでいる。出来れば、危険なことはして欲しくないから、こちらに住ませたいのだが、あの子がやって来る目的は、家の書庫だけだろう。」

「ははあ、なるほど。書物といっても、漢字ばかりのものですよね。和歌の話など、とても嫌そうにしましたよ。あれでは、先が思いやられる。」

「う～ん。何とかならんもんか・・・。」

箏の音が一層大きくなった。大納言が少し首を傾げる。

「しかし、ゆり姫を帰したほうが安全ではありませんか？今日は、箏を聞いていた者も多くいますし、噂になったら、ゆり姫も后がねと言えなくもないですから。怪異なら、母君のものほ

うが……。」

「まさか、まだ子供だ。それに、間違っても、后にとは思っておらん。……ところで、この箏は誰が弾いているのだ？」

音色は、高く低く波のように邸内に満ちていく。

「え？ゆり姫じゃないのですか。」

「違うだろう。」

時貞は、心と昼間の音を思い出す。

にわかに、腰が浮く。

邸内に響き渡るそれは、怪しい闇を誘うような音だ。

突然、音が乱れ打ったように、不快な音が続き、轟と、風が吹き抜けたかと思うと、ぷつん、と、いきなり箏の糸が切れる音がして、静かになった。

時貞が、西の対へ向かおうとした時、こちらに乱れた足音が近付き、紫野が駆け込んできた。

「ひ、姫さまがっ……お姿が見えません。部屋で一緒に休んでいたはずの、まとのと共になくなって……。」

蒼白な顔で駆け込んできた紫野。

突風のあと、気になって室に様子を見に行ったところ、一緒にいた箏の女の童さえも姿を消した。彼女の報とともに、大納言邸は、一時騒然となった。

邸内の庭の暗がり。暗い足元を物にぶつからないように、こそこそと前へ進んでいく。ちょうど、弦月で明るすぎることはない。門へ向かって、こっそり歩いている。

ゆりのあとを歩く雨水(うすい)は、困惑した表情でついて行く。

今しがた、ゆりに叩き起こされたところなのだ。

もう、半分眠りについてた雨水(うすい)は、揺り起こされて目を開けた。

夢を見ていると、思った。

まだ、頭がぼんやりしていた。

真っ暗な室内に外の星明りの頼りない明かりの中で、自分を覗き込むゆりの顔を見て、手を伸ばす。伸ばした手の先に人の温かみを感じられ、ぎょっと、なって目が覚めた。

心臓に悪いよな・・・と、雨水(うすい)は、今、前を歩いているゆりの背を見て思う。

雨水(うすい)の視線を感じて、ゆりが振り向く。

「どうかした？なんか、顔赤いよ。」

「篝火の近くだからじゃないですか・・・。」

ちょうど、篝火の近くに来ていたので、その火の熱の加減だろうか。ゆりは、小首を傾げる。雨水(うすい)は、ちょっと不機嫌そうに見える。

「それより、ゆりさま。笛を持ってついて来いって、どういう意味ですか。」

「音の出る物なら、何でもいいんだけど。今から行く家で、必要だから。」

「そうですか。」

足を止めて話していた彼らの背後の暗闇から人が現われた。

反射的に身を硬くしたふたり。姿を現した人物は、腰に手を充てて仁王立ちだ。

昼間、雨水(うすい)を取り押さえた武者が立っている。

「これは、どういうことですか？雨水(うすい)、だめじゃないか、お止めしないと。」

何とかゆりの名を口にしないように叱っている。辺りに、人はいないとはいえ、まだ、邸内を出ていない。他人に、ゆりの名が聞かれるおそれがあるためだ。

「平太。えっと、このまま、見なかったことにしてくれないかな？」

「駄目です。後で知れたら、主に私が叱られますから。」

「そんな・・・。」

そんなやり取りをしていると、邸内のどこかから、箏の音が聞こえてきた。誰が弾いているのかしら・・・と、ゆりは耳を澄ます。

「・・・・・・・・・・。」

おかしい。そう思ったとき、弦の切れる音が・・・・・・・・！

一瞬にして、巻き起こった風が邸内を吹き抜ける。

吹き飛ばされないように、そばにいた平太が、ゆりと雨水(うすい)を両手に庇う。

風がおさまる。風の去って行った方向を睨み、ゆりはすぐに印を結び、その気配を追う。途中まで、追ったところで、突然頭の中で、弦の切れるような、ぷつり、という音が聞こえ、ゆりの頭は揺すられたようにくらくらとなる。

「唐車・・・。」

牛の引いていない車が、独りでに、からからと。ここからそう遠くない通りを移動している。その姿を確認したとたん、ゆりの意識は跳ね返されてしまった。

「ゆりさま？」

雨水(うすい)の声が聞こえる。

ゆりは、ふらりと倒れてしまいそうになり、思わず隣の雨水(うすい)の肩に寄りかかってしまう。そのまま、屈みこむのも半分彼が支える力を借りた。心配そうに覗き込む雨水(うすい)に「大丈夫だから。」と、つぶやく。

腰の刀に手を添えて、あたりを警戒している平太が言う。

「邸内が騒がしいようですな。人目につかないうちに、お戻りになったほうが・・・。」

「そうね。人のいない、釣り殿のあたりに着替えを隠してあるの。そっちに回ってから、戻るわ。」
慌ただしい、人の足音が聞こえ、平太はゆりを木の影に隠した。

平太が厳しい顔で、振り返る。近付いてきたのは、同じ、この屋敷を警護する仲間だ。

「どうした？」

「いや、急に邸内の身回りをするようにと仰せがあって・・・先ほどの、つむじ風でどこか不具合はないか調べろという、わかったようなわからんようなお達しだ。平太は、殿がお呼びだぞ。・・・ん？なんだ、昼間武芸を見習いたいとか言ってたガキか。平太よ。昼間も構ってやっていたが、随分気にいったんだな。」

「まあな。なかなか、根性のある奴だ。気に入った。」

「そうか、じゃあ、俺はこれで、寝ている連中も叩き起こさないといかん。」

「おお。じゃあな。」

平太は、自分に下された命を果たすべく、去っていく同僚と違う方向へ向かう。先に、同僚が遠くへ去って行ったのを確認すると、雨水(うすい)を振り返る。

「雨水(うすい)。念のため、姫さまについて行け。部屋にお戻りになるまで、目立たぬように建物には上がらず、庭を回ってついて行くんだぞ。」

「はい。」

「姫さまは、先に殿のところへ行かれてから、お戻りください。中で、女達の足音が、ばたばたしているようなので、おそらく、姫さまのことでしょう。殿に顔を見せて安心させてあげてください。」

ゆりが、木の影から姿を現し、頷く。先にゆり達が、東の釣り殿のほうに去っていくのを確かめて、平太は、大納言の居室のある方へ向かう。

人が、うろうろしている。主殿の端で、真っ青な顔で大納言のもとへむかう時貞を、見つけ、平太は、ゆりのことを耳打ちする。時貞は、慌てて、東の釣り殿のほうへ向かった。

庭先から、大納言にも声をかけ、報告する。女房たちの、上を下への大騒ぎも、ひとまず一段落した頃、時貞に伴われて、ゆりがやって来た。

「ゆりっ。人騒がせな、夜中に姫が姿を消して、どれだけ心配させたと思っているのだった。」

「ごめんなさい・・・。」

すなおに頭をさげる娘に、まだ、怒っている大納言が口を開きかけた時、横から、声がかかる。「父上。ゆり姫は、釣り殿で星空を眺めていたのだそうです。今日は、星がきれいですからね。けれど、突然、突風が吹きぬけて、怖くなって物陰に隠れて怯えていたら、そのうち、女房たちが騒ぎ始めて、よけいに出られなくなったそうです。」

時貞が言った。まだ、この場には女房たちが残っている。彼女たちを納得させる理由を代わりに、口にしたのだ。

「やれやれ、小さな子供でもあるまいに・・・。」

大納言は、苦い表情で、ゆりを近くに座らせる。居残っていた、女房たちに戻るように言った。ゆり付きの紫野だけは、残るようにいう。

彼女から、部屋に誰もいない事情を聞くと、ゆりは愕然とする。

「きっと、符を燃やして、術を返しちゃったから、臍をまげているのね。こんな、意地悪する奴だったなんて・・・。まとのを返してもらわなくっちゃ。」

立ちかけるゆりを、大納言が押しとどめる。

「父上。放してください。」

「待て。相手は、ここのところ京を騒がせてる誘拐事件の犯人かもしれないぞ。」

ゆりは、父と兄の顔を交互に見ている。・・・・・・・・・・？

「事件の犯人って・・・あ～！兄上！昼間の、やっぱり何か関係があるんですね。もう、なんで隠すかなあ。」

「いや、下手に最後まで首をつっこまれても、私が困るから・・・。」

苦笑いしつつ時貞がのんびりと答えた。

けれど、ゆりは、一連の姫君失踪と、状況を省みて、首を振った。

ゆりが、今日からしばらくこの屋敷で生活することになったことは、身内以外、ほとんど知っている人はいない。

今日、他の屋敷で目立ってしまったからといって、すぐに反応するものだろうか・・・。

それよりも、符を燃やしてしまった同業者の嫌がらせのほうが線が濃い。その同業者宅へ今から行く、と言って聞かない彼女を、大納言たちは止めることが出来なかった。

「まとのは、家族みたいなものだから、早く行ってやらなくちゃ。怖い思いをしているに違いないわ。それに、これは、同業者の私への挑戦だわ。黙って、何もしなかったら、この後、なめられる。売られた喧嘩は買う主義なの。」

「そんな・・・。相手がわかっているのなら、手をまわすことも出来る。売られた喧嘩に破れたら、どうするんだ。姫のすることじゃない。」

「負けませんってば。それに、姫君は、ずっとやってるつもりもありませんから。じゃなきゃ、ここ

にはもう、絶対来ないっ。」

「ゆりっ。」

と、どこまでも、言い争いが続きそうな二人。時貞が割ってはいる。

「では、ゆり姫。その同業者の仕業だと言い張るのですね。一連の事件に関係ある人物だとすると、危険なのですよ。」

「・・・そこなのよね。変人だけど、割りの合わない悪事に加担するようにも思えないのだけど・・・。でも、あの、つむじ風。わずかに、桜の匂いがした。」

「あくまでも、可能性のひとつというわけだな。もしも、あてが外れたら？」

「あのつむじ風に混じって、桜の香りがしたの。だから、あれは・・・間違いないもの。もし、違っていたら、どういうつもりなのか、訊いてみなくちゃ。」

「わかった、私も同行しよう。もしも、あてが外れたら、そのあとは勝手に、うろうろ、嗅ぎ回るの、なし。」

「え、でも。」

「でも、じゃない。そのかわり、手伝ってはもらうが、報告もなしに、一人で出歩くのはなしだ。約束できなければ、柱にくくりつけても、行かせない。どうだ？」

「・・・わかった。」

「父上。ゆり姫をお借りします。」

どのみち大人しくしていないのなら、監視付きで動くほうがいいかもしれない。大納言は、承諾すると、溜息をつく。渋い顔した大納言に見送られて、ゆりは、当初の目的地へと向かった。

左京の東の市より南。六条の賀茂川附近で、河原(かわら)の院のあった辺りにほど近い場所。栄華を極めたはずなのに、無念があったのか何だか、大昔に、死んだ大臣が祟るとか・・・この辺りは、今は、怪異が続くという気味の悪い噂のある地であり、貴族の屋敷どころか庶民の小宅でさえ、まばらにしかないところだ。

左京は、高級住宅の多い華やかな雰囲気だが、この辺りに来ると、さすがに小さな家さも少なく、荒れ果てた土地が目立つ。歩いてると、薄気味悪いが、丁度良いことに、家が少ないので、程なくその屋敷を見つけることが出来た。

長い築地に囲まれたその屋敷は、外から臨むとこんもりと繁った森を飲み込んでいたようだった。

門をくぐったところに、ピンクの花を咲かせた桜が咲いている。

ひとつだけなら、狂い咲きか、と思っただろう。

けれど、その足元には菜の花ではなくて、菊の黄色い花。

どこからか、藤の匂いも漂ってくる。・・・・・・・・。

せみが、ジイジイ鳴いている、真夏の庭のはず、なのに。

いろんな四季の庭の彩が混在しているおかしな光景が目飛び込んでくる。

「家よりひどい、ばけもの屋敷ね。」

眩くゆりの前には、ピンクの花を咲かせた桜が、どうやって移動したのか、ぺこりと、お辞儀した。同行者の時貞も、武者の平太も、雨水(うすい)も固まっている。

目の前に延びた枝の一本に、ゆりが、ちょいちょいと追い払うように、手を振る。

「案内は結構よ。勝手に通るから。それより、ここに残る私の同行者に何かしたら、承知しないから。いいこと？」

じろりと、気迫をこめて、一睨みしたゆり。桜は、すっ、すすっ・・・と、後ろに退きながら、幹を揺らした。首を縦にしたつもりだろう。

それを確認すると、ゆりは振り返り、雨水(うすい)に笛をずっと吹いているように頼んだ。

「それじゃあ、私、一人で行くから。平太は、雨水(うすい)が集中して吹いていられるように気を配ってあげて。もし、何かあったら、その桜、ぼっさりと刀で斬っちゃっていいから。」

「はい。姫さまも、お気をつけて。何かあれば、声をあげて下され。この屋敷の規模なら、聞こえますから、矢を射てあの屋根に火をつけます。」

必要以上に大きな声で怒鳴っているから、中の陰陽師に聞こえるように言っているのだ。平太は、携えてきた弓を示した。

「・・・そうね。それも、手かも。でも、こっちが火に巻かれる可能性が大きいし、それに・・・。」

燃え広がれば、巻き込まれる人のいることを念を押して留め置く。ゆりは踵を返して、中に一步踏み入れる瞬間、ちらりと視線を走らせ、さっきからずっと押し黙っている時貞に合図する。この屋敷に入る前に、やはり、一人で対決するのを反対されたゆりが、時貞を伴うことになり、目くらましの

符を彼の背に貼り付けた。

ここぞという時以外は、絶対に何があっても言葉を発してはならない、と、言っている。話すとか効力がなくなるのだ。時貞の手には、太刀が握られていた。

中の建物に上がると、さっきまで見えていたはずの庭の光景が、違う。微妙に、建物の外周を回っているだけの廊下の様子が、おかしい。ゆりは、何気なく、時貞の前に立って、そっと自分の着ている水干の端を握らせる。

ゆっくりと、前に歩を進める。

目の前の空気が揺れて、目がちかちかする、と、時貞は思った。

ゆりは、じっと一点を見つめている。独り言のように呟く。

「こんなに、嚴重に結界を張るなんて、後ろめたいことでもあるのかしら・・・？趣味でやってるなら、奇人だわ。でも、私に結界は通じないもんね。こういうの破るの得意なのよ。」

見つめているその先に、あかんべっと、舌を出す。ゆりが、迷いなく歩き始めると、後ろに従ってついていく時貞も、ちかちかしていた目が、だんだん落ち着いてきた。

門から見えていた主殿の屋根は、近くに感じられた。だが、一旦中に入ってみると、今上がってきた釣り殿から、随分時間がかかる。

やっと、たどりついた。・・・。

塀の外からの様子だと、屋敷全体が、森のような感じだったが、辿り着いた、主殿は、広くなった廂の間から空の月や星空を眺め易いように、庭の木も枝が邪魔にならないように配慮され、広く平らな場所が確保されていた。白砂はさすがに、撒かれていなかったが、土を均し、その上には、ごつごつした岩が、何故か、一定の間隔を開けて、ごろんと置かれてる。月の光で、岩の影が長く平らな地面に伸びていた・・・。変な庭だ。けれど、広がる夜空と、庭に月影の落ちる光景は幻想的で、こんな時でなかったら、ゆりは、このちょっと風変わりな庭をながめて楽しめただろう。

庭に臨む室内は、格子がすべて開け放たれ、いかにも出入り自由といった趣。

中央に座っていた人物が、こちらを見た。

どことなく冷やりとする空気を感じる男。まだ、若く、そこそこ整った顔立ちをしているだけに、彼の持つ雰囲気や陰謀を隠せないのは、陰陽師として好いのか、悪いのか・・・。

どすっと、足音をさせて、無作法に室に闖入して来たゆりに、一瞬きつい視線を投げかけたけれど、すぐにそれをおさめ、無表情な顔で答えた。

「足音も荒々しく登場とは、まるで、盗賊のようだな。まあ、風流な笛つきなので、歓迎してやってもいいが。」

雨水(うすい)の吹く笛の音が、さっきから、流れてくる。ここに、ゆりがやって来ることは、分かっていたことなのだ。馬鹿にしたような顔で、こちらを見ている。

ゆりが、むっとしながら、くって掛かる。

「まとのを返して。どういうつもり？意趣返しなら、直接私を狙いなさいよ。・・・っ！」

藤蔓が、ゆりの手に巻きついている。その藤蔓は、どこからか、するすると伸びてきた。

いつの間にか、庭の風景が変わっている。廂のすぐ脇に藤棚が来ていた。動かそうとすると、その動きを封じるように、ますますきつく、巻きつく。

印が結べない。焦る。ゆりのそばに、冷笑がある。

「ゆりどのは、おバカですね。相手の陣地に、下調べもなく踏み込むなど。そうやって、印が結べなければ、どう戦うつもりだったんです。こうなってしまえば、男の力に、女の細腕で適うはずはない。」

ゆりの頬を冷たい手が、撫でた。するすると、肩のところまで降りていく。ぞくっ。本能的に身を硬くする。

「薫風(くんぷう)っ。それ以上近付いたら、蹴飛ばすからね。」

喚く。黙ってしまえばそのまま負けそうで、わめき続ける。

「都を騒がす姫君失踪事件も、あなたがやったの？何のために？」

「・・・ああ、そう言えば、ゆりどのも、姫君には違いないか。こんな乱暴な女を攫う奴の気がしれないけど・・・。もう少し、女の自覚を持ったほうがいいんじゃないか？」

「それ以上。よっ、寄るなっ。」

ゆりの言葉を無視して、薫風の顔がまた一段と、近付いてくる。首筋に手をかけようとした時、彼は、己の首に冷たい感触を感じて動きを止める。

「そこまでだ。」

「！」

声とともに、抜き身の刀を薫風の首にあてている時貞が現われた。それでも、じろりと確認しただけで、薫風の顔色は変わらない。

「笛と、やたら大声の侍は、惑わしか。こちらも、自分の力を過信していて、気付かなかった。同じように、隠行の術を使っていたというのに。やれやれ。」

「妹を離せ。このまま、刀を引けば、命はないぞ。」

きらっ、と、薫風の首筋で太刀が、銀色に光る。

「両手は、自由なのだが・・・。」

その言葉に、ゆりがきっと睨む。だが、薫風は動くでもなく、面倒くさそうに見ている。

「大納言家のご子息に何かあったら、私は京にいられない。姫に手をだしても、そうでしょう。もともと、そのつもりもありませんが、ゆりどのは忠告してあげただけですよ。ああ、そう、お預かりした女童をお返しします。」

そう言って、薫風が片手で印をつくると、紙が破れる音が響き、室の奥の几帳の前に、まとのが姿を現した。同時に、彼女を拘束していた小袿姿の者が姿を現してすぐ消えた。

「言っておきますが、一連の事件とは無関係です。ゆりどのに、こちらに来ていただく予定だったの

ですが、桜の奴、そちらの女の童を間違えて連れて来てしまった。ゆりどのが、そのうち、怒鳴り込んで来るだろうと思って、しばらくそこに居てもらったんですよ。」

そう言うと、ゆりの手に巻きついている藤蔓がするすると解けた。自由になったゆりは、一目散に、まとののほうへ駆け寄る。

ひしっ、と、まとのが抱きついてくるのをゆりが受け止める。

「ゆりさまあっ。」

「怖かったよね。大丈夫？どこも何ともない？」

「それは・・・びっくりしましたが、きっと迎えに来てくださると思ってましたし、こちらでは菓子などを出してもらって、持て成していただきました。」

「・・・・・・・・。」

ふいに、近くの床の上に、猫目のあきらかに人ではない、女房が現われ、平伏した。

顔をあげ、菓子を盛った高槻を捧げ持ち、いつのまにか用意された席のそばにそれを置き、袖を揺らして、ゆりにどうぞと、いわんばかりに示している。

思いっきりうろんな顔つきで、薫風を振り返る。

薫風は、まだ、時貞に捕らえられている。

「桔梗御前から、頼まれた。適当に、こき使ってもいいから、こちらで預かってくれと。彼のお方が母とわかっていれば、狙われることもなかろうが、知っている者も少ないから。何せ、分家とはいえ、陰陽寮を二分する勢力のひとつの一族をまるまる敵にまわすようなものだし・・・いや、陰陽の頭は君たち一族の当主だから、つるの一声で、まるまる陰陽寮を敵にまわすことにもなるか。」

桔梗は、ゆりの母の名だ。彼女から、夕刻に使いが来て頼まれたと、言った。

「そういうつもりなら、使いを出しなさいよ。」

「いや。さすがに、こちらで預かるつもりはなくて、出向くつもりだった。ゆりどのに破られた術が跳ね返って・・・。」

薫風が右手をあげて、見えるように示す。布を巻き手当したあとが見える。

「あ・・・符を燃やしたから、やっぱり跳ね返ったんだ。」

「今日、明日ぐらいは使えないだろう。筆が持てない。明日は予定があるのだが、それに携えていく符をいくつか書いてもらおうと思った。」

「だったら、素直にお願いしますって言えばいいじゃない？」

「半分は、忠告だ。今日は、大納言家の姫君として、随分目立ったことをしただろう？あのお屋敷には出入りしている公達も結構いる。仕える者たちの口から、箒の上手の姫君の話が噂になるのは、早いぞ。今日明日で、どうかなるとは思わんが、注意を促しておけば、二三日は自分で気をつけて何とかかなるだろうと、思っていた。」

「二、三日？」

「本業の方で忙しい。明日の予定は違うのだが、その間、ゆりどのを守ってる余裕がないんでね。」

「う～ん。あのさ、私が父上の屋敷にいたら、また、他の誰かが巻き込まれる可能性もあるよね？」

「あり得る話だな。」

薫風の首に当てられた刀が離れ、太刀は時貞の鞘に仕舞われる。薫風は、時貞にも、席を勧めた。ゆりは、まとのをそばに置いて、もうちゃっかり座っている。

「それなら、助手として、ついて行くわ。符を書いて行っても、その場でまた、違うのが必要になるかもしれないでしょ。あなたの使う式神たちは、昼間はあまり役に立たないんじゃないくて？」

それを聞いていた時貞が、反対する。

「待て、勝手に動きまわるなと約束しただろう。」

「でも、このほうが危険はないのではなくて？」

薫風が首を振った。

「目の届くところにいれば助かるが、大納言さまが承知なさらないだろう。」

「父上の了解をえれば、いいのね？」

「もらえればね……。右近の少将さまも、それでよろしいか？」

時貞が頷く。とりあえず、駄目だった時の為にと、ゆりは符を書かされる。

帰りは、門のところまで、薫風が付いて来た。

門の近くで、待っている平太が、無事、まとのを連れた、ゆりたちに気付く。一心に、笛を吹いていた、雨水(うすい)に教えてやる。笛の音が止み、ゆりたちが彼らに近寄って来る。

桜の木のそばに、いつのまにか、藤棚が出現する。

平太が驚いている。

「・・・面妖な。いつの間に生えて来たんだ。」

「さっきの主殿の庭に咲いていた藤ではないか？・・・それにしても、桜といい、この藤といい、蝉が鳴く季節に咲いているのは、どういうわけだ・・・。」

うっかり、時貞が藤棚に近付いた。

しなっ。紫色の薄い霞のようなものが彼を取り巻く。

くらっ、と、足元が揺れる感覚。ふらふらと、寄って行きたくなるような衝動を覚えて、危ういところで堪える。

何だ・・・？

そう思った時、桜の木の枝が、それをばさばさと邪魔をし、ついで、ピンクの霞が、紫の霞と同じように、取り巻く。

強く惹きつけられるというのだろうか、足を一步出しそうになりながら、心のどこかで危険だと、警鐘を鳴らす己の声が聞こえる。

「やめよ。」

薫風の声と、同時に、笛の音も鳴った。

雨水(うすい)が短く曲を奏でる。その音を聞くと、にわかに体が楽になる。ゆりに言われて、雨水(うすい)が奏でた、曲が、時貞を呪縛から解き放った。

どのみち、桜と藤は、互いに牽制仕合い、今や呪縛そっちのけで、枝をぶつけ合って喧嘩しているから、その呪縛の効力も薄れていたが。・・・。

桜と藤の花が舞い散り、ぶつかって思わぬ方向へ撓る、枝で、被害が及びそうだ。

薫風がひと睨みすると、それらは、喧嘩をやめて、そっぽを向くように、ぶんと、枝を振り回し、

互いに違う方向を向き、どしんどしんと地響きを立てながら、それぞれの場所へ戻って行く。

あとには、穴ぼこが沢山出来ていた。

「何なの？この庭。あんなのばかりなの？」

「いや。化け物の類だから、あれらは。他は違う。そう、ちょうど右近の少将さまのような、若くて見目のよい若者を誑かして恐れられたのを、引っこ抜いてきた。こっちに来てからは、そんなことはないのだが、たまに思い出してしまうらしい。まあ、生気を吸い取られて・・・なんてことには、ならないようにはしてある。妖気が強いので、役に立つのだ。」

「役に立っても、そんなのいらない。」

あはは・・・と、ゆりの言葉を聞いて笑う薫風。

困惑して見ている時貞を軽く無視して、雨水(うすい)を見ている。

「良い笛の音だ。大納言家の雑色か。」

「いいえ。」

「では、ゆりどのの、家の・・・。名は？」

「雨水(うすい)です。」

「雨水(うすい)・・・桔梗御前にもらった名か。」

「はい。雨の日に、ゆりさまに拾っていただいたので・・・その、記憶を無くして、呼ぶにも不便だからと。」

「ああ。良い名をいただいたね。雨の日だから、じゃない。暦からだ。冬が終わって、春が始まる頃に降る雨はまだ、冷たい。けれど、雨が降り続いたあと、季節が変わり、草木が蘇り春を呼ぶ。雨水(うすい)、その笛を手放さずに、なるべくゆりどのと行動をともにするといい。」

くるりと視線を時貞に向けて、言う。

「少将さま。この雨水(うすい)の笛が邪気を祓ったことを、身を持って体験されましたね？ゆりどのの側に、なるべく置いておいたほうがいい。大納言さまにも、そう申し上げてください。」

「わかった。」

時貞が頷く。

ゆりが目を瞬いている。

ああ、やっぱり分ってやってたんじゃないな、と、そんな顔している薫風。

「ゆりどの。くれぐれも、野生の勘で、ひとりで動き回らないように。」

最後に、釘を刺しておく。薫風に見送られ、ゆりたちは帰途についた。

乾いて埃っぽい道を、薫風に従って、歩いていく。

ちょうど、通り過ぎた荷車の車輪が、土を舞い上がらせる。

車が通り過ぎたあと、ゆりは思わず、髪や衣を叩いていて、ふと思い出し、昨日の夜、まとのを運んだ、唐車のことを、薫風に訊いてみる。

「唐車？何のことだ。さすがに、そんな式神は持っていない。」

唐車とは牛車の種類。糸毛の車、八葉の車、網代車・・・等。大きさや造りの美麗さは違うが皆、牛車である。家の格式や、それを使う人によって、仕様の異なる車の中で、唐車は、最も格式高い車だ。物の怪とはいえ、一介の陰陽師、しかも位階も低い一官人の家に入入りしていれば非常に目立ち、目撃されれば、立場のまずくなる代物。さすがの薫風も、そんな式神を堂々と使うのは、憚られると、彼は言った。

「じゃあ、たまたま、妖怪を見ただけなの・・・。」

「そうだろう。あの時間じゃ、そんな奴に出くわしてもおかしくない。」

薫風は、ゆりの好奇心を封じるよう、言下に否定した。実は、彼の持っている情報と、一致する事実があるのだが、すべてを話してやると、どんな行動にでるか分からない。

このお嬢ちゃんは、一応ある程度は信用出来るが・・・。

勝手に動くなと約束していても、すべて信用は出来ないところがあると、薫風は思っている。また、頼まれもしないことで、動くのは、ごめんだと思ってもいた。

「それにしても、大納言さまは、よく許して下さったな・・・。」

今朝、雨水(うすい)をつけて、薫風のところへゆりを送って来た時は、驚いた。

この姿のほうが安全ならと、童子の格好をさせて、昨日、一緒にいた武者に送らせたのだ。

その武者から、聞いたところによると、大納言は、「しばらく、息子が増えたと思って、過ぎすぎ。」と笑っていたという。屋敷の女房たちには、しばらく知り合いから頼まれた若君を預かっているということで、ゆり姫が攫われるのを防ぐ、と、緘口令を布いてあるのだそうだ。自由に過ごせるので、気のせいか、ゆりがうきうきしていた。

今、町中をとっそこ歩くゆりは、どう見ても、陰陽師、薫風の弟子の童子といった感じだ。

半ばあきれ顔で、薫風は、まじまじと、その様子を観察してしまう。

その時、道を行く若い女が、うっかり向うからやって来た牛車が間近に迫るまで気付かず、すんでの所をやっと避けて、バランスを崩してこけてしまった。「大丈夫？」駆け寄って、助け起こしたゆりを見て、女は、頬を染める。ちょうど、元服前ぐらいの年齢の美少年にしか見えない。

見送って、薫風の視線を感じ、ゆりが振り返る。

「何？」

「いや。男に生まれるべきだったな・・・。」

「ちょっと、どういう意味かしら？」

「他意はない。さっきの女が、美少年に助けられて頬を染めていたぞ。」

「あれ、薫風師の方を見ていたわよ。」

一応、慣れるために、師をつけてみた。これから、行く先では助手なのだ。訊かれれば、まだ、若い薫風の直接の弟子ではなく、経験を積ませるために、人から預かっている者たちということにしている。

「いや。ゆりどのと、そばにいた雨水(うすい)を見ていたな。・・・それはそうと、呼び名はどうする。文月でどうだ？」

「文月ね。わかった。」

ゆりは、ぼうっと、遠くを見ている雨水(うすい)に気付き、声をかける。記憶を無くした彼は、たまたま、こういう時があるのだ。真っ青な空を見ている。

「すみません。ぼっとしちゃって・・・。」

「ううん。何か、思い出しそうだった？」

「いえ・・・。」

「そっか。そのうち、きっと思い出すよ。大丈夫。」

ゆりの笑顔に、心もとなげだった雨水(うすい)の顔も晴れる。薫風に促されて、二人もまた、歩き始める。

目的地につく。左大臣家ゆかりの屋敷だ。

「わあ。大ききな家。きれいな人たちがいっぱいだね。」

お屋敷などは見慣れたゆりも、びっくりするほど、広大で、隅々まで磨きたてられた屋敷だ。

ここは、左大臣の娘の女御の里邸なのだ。着飾った女房たちが行き来している。

ゆりの同意を求める言葉に、雨水(うすい)が比較のしようがなくて首を捻る。くすっ。そのやりとりを見ている、女房たちが笑った。直接ではないけれど、何だが物見高い視線を感じる。

あまり、好意的には感じられないな・・・と、ゆりと雨水(うすい)は顔を見合わせた。

薫風について、通された間には、御簾で仕切られた奥の、そのまた几帳で隠されたその奥に、人の気配がする。

「お恐れながら、何かの瘴気に当てられたようですね。ゆうべは、何かありましたか？」

「いいえ。それが、皆目・・・。昨日は、久しぶりにご姉妹がいらして、女御さまも、夜は音曲など奏で楽しんでおられましたのに・・・。」

御簾内に入る許しを得て、平伏していた薫風たちが、頭を上げ、立ち上がろうとした時のことだった。

外で咳払いがして、廂から、女房をひとり従えて女御の妹が入って来た。

「四の君さま。」

こちらを訪問することは、あらかじめ分かっていた。けれど、思ったより早かったのだろう。少し、お付の女房たちが慌てている。女房が、ちらちらと、薫風のほうを見ている。どうぞ、かまいませんというふうに、彼が頷く。そのあと、彼は四の君の連れてきた女房をじっと見ている。彼女も、横目でじっとこちらを伺っている。突き刺さるような厳しい薫風の眼と比べると、切れの長い瞳で、流し目のように色っぽくみえたが。

「姉上さま。箏をお聞きになりたいと仰せでしたわね。水無瀬を連れてきましたわ。少しぐらいの気

鬱なら、晴れましてよ。」

「・・・そうね・・・」

女御が、ぼんやり呟いている。四の君が、まわりの空気を無視して言うのに、女御についていた女房が四の君をたしなめる。薫風が、口を開いた。

「それはよい考えかと・・・。音曲は、本来、陽の気に通ずるものですから、失礼ながら、私どもも、お力添いしましょう。」

「まあ、それで、祓えますの？」

「時と場合によります。」

四の君をたしなめていた女房が訊いた。主の女御の意見を伺う。

「・・・お願い・・・して・・・。」

聞き取りにくい小さな声で承諾があって、薫風たちも加わることになる。

水無瀬という女房が箏を弾き、薫風と雨水(うすい)が笛。ゆりが念のため箏を敬遠して琵琶。三人は、水無瀬から離れて、まるで対峙するように座っている。

箏の音が先に、鳴り始めると、びくっと、雨水(うすい)が震えた。

「大丈夫。私について伴奏して音を補ってくれればいい。」

まだ、手が自由に動くとはいかないので、思うように曲を奏でられないかもしれない。

薫風が雨水(うすい)にそう言って、頷く。ゆりの方を見ると、彼女はわかってるというふうに頷いた。

どことなく、悲しげな箏の響きに、三つの音が追いつく。

どこまでも、暗く沈んで行きそうな、箏の音。

聴いている者たちを深い眠りに誘って、暗闇に引きずり込んでしまいそうになる。

その音の糸でもって、奈落の底に沈める・・・。

突然。その暗闇に、ひとつ、ふたつ、みっつ、小さな光が灯って、追いついていく。

光が追いつき、引きずり上げ、また、闇の音に追い越され、それを光が追う。

邸内の者が、気を失っていた。

ゆりは、琵琶を弾きながら、絡みつような視線を感じている。それは、自分に向けられたものではない。

何故と、一瞬気が殺がれそうになり、薫風の眼差しとぶつかる。薫風の額には、汗が浮かんでいる。今、訊ねるわけにもいかず、ゆりは慌てて、薫風たちの加勢をするため、集中する。

曲を転調し、一気に明るい音で満たし、闇を圧倒する。

ぷつん、糸の切れる音がして、箏を弾いていた水無瀬がぐらっ、と、上体を揺らす。

しばらく、三人の合奏が続いて、ゆっくりと曲は終わった。

はっ、と、気がつく人々。

「失礼しました・・・心地よくて。あら、おほほ・・・。」

と、女房の一人が、誤魔化すように笑い、具合が悪そうにしている水無瀬に気付くと、駆け寄った。

「少し、ご無理をなされたようですな。どこかで、休ませてあげてください。」

と。薫風は、言ったけれど、水無瀬は、首を横に振りながら、介抱を断った。

「陰陽師どの。そちらの、笛を吹いていた方は、お弟子ですか？」

「雨水(うすい)ですか？いえ、私の弟子というわけでは・・・、そろそろ実践させたいからと頼まれた者です。」

「雨水(うすい)どのと、おっしゃるの・・・そう・・・実践ということは、長いこと修行をされていたのですね。」

「そのように聞いています。それが・・・？」

「いえ、あの、とても美しい音色でしたわ・・・。」

水無瀬は、苦しそうに息を吐いた。皆に言われて、おっくうそうに体を動かしながら、その場を去って行く。ゆりの感じた、あの絡みつくような視線は、もうしない。

女御は、すぐに起き上がれるようになった。

薫風は、いくつか、対処法を伝えてから、その許を去る。

外へ出て、しばらく無言で歩いたあと、人の多い雑踏の中で、薫風がゆりに言った。

「ゆりどの。あのものの、気配気付いたか？どうしてあのようなものが、紛れこめたのかわからんが・・・」

「かなり強い妖気を放っていたわね。何が目的かしら・・・。」

あの水瀬と名乗る女房は、箏を弾きながら、妖気を放っていた。

「どうして、雨水(うすい)を気にしていたのかしら・・・。」

「それは、わからない。」

おそらく、彼の消えた記憶と関係あるかもしれないと、薫風もゆりも考えたが、雨水(うすい)の気持ちを思って口にはしない。

「悪いが、こっそり陰陽寮にも付いてきてくれ。」

水瀬のことは依頼主である左大臣には、あとで伝える。目的はわからないが、政敵が多い家に、仇を成す者が紛れ込むことは、ままあることなので、伝えれば、あとは自家で処分をするだろう。それよりも、水瀬がもう、あの場所にいない確率のほうが高いが・・・気になってるのは、雨水に向けていた視線だ。

これから、自分が、仕事に行ってる間、ゆりと二人、家に戻すのは危険かもしれない。出仕の間は、さすがに、自分の家で待たせとこう、と思っていたのだが・・・。

厄介事が増えたな、と、薫風は、思っていた。

「えっ？」

「見つかったら、誰かの使いをしている童のふりをするといい。」

ゆりは、眼を見開いて、まじまじ・・・と薫風の顔を見た。・・・結局、係ってしまった人を見捨てるようなことはしないのね。と。ゆりは、笑みを浮かべ、大きく肯く。

「わかった。雨水(うすい)もいっしょね。」

「ああ。」

すぐには、術が使えないだろうが、追ってこれないようにしておく必要もある。薫風たちは、先を急いだ。

大内裏の一角、陰陽寮。

大内裏とは、それぞれの部署の建物が立ち並ぶ、官庁街だ。

官人達は、朝早く出勤し、仕事はほぼ午前中で終わってしまうので、他の部署は、残っているものは、昼間は、仮眠をとったり、どこものんびりしているのに、ここは起きて働いている者がいる。と、いっても、ばたばた、走り回るようなのではなくて、長局で机を並べ、書き物をしているものとか、書物を広げ調べものをしているといったふうな感じではあるが……。ゆりと、雨水(うすい)は、難なくここまで、薫風についてもぐりこむことが出来た。

「おい。猫の手を連れてきたぞ。」

入るなり、薫風が、同僚に向かって言うと、最初から、それが目的だったのでは、と、疑うほど、色々な人に雑用を頼まれて、立ち働いている。

ゆりが頼まれた巻物を取ってくると、雨水(うすい)が硯に墨をすって注ぎ足している。首をかしげ、巻物を渡しながら、訊いた。

「あの。いつも、こんなに忙しいんですか？」

「いや。そんなことは……。くそ、字、間違えた。もう、手が限界だあつ。」

薫風より、ひとつふたつ、年上だろうか。その人物が諦めたように筆を置く。

「おい、薫風。ただでさえ、人手がないのに、右手を負傷しやがって……。」

「だから、人手を連れて来ただろう？」

「あほか。いくら、何でも、子供に頼めることか。」

「あ？別に、そっちの京へ、流入してきた者たちの名前ぐらい、かまわんのじゃないか？それ、数を把握するためのものだろ。」

薫風は、脇に詰まれている箱を指差す。そっちも、仕事が滞ったままだったかと、文句を垂れていた人物が、はあっと溜息をつく。ゆりの方を見た。

「ここに、いる、ってことは全く無関係の家の子じゃあないよな。しゃあない。手伝ってもらうか。手がまわらなくて、溜まったままなものな。」

ゆりと、雨水(うすい)を手招きして、頼む。

「いつもは、もっと、のんびりしたところなんだが、欠席者が多くて……。上から言われて他で働いてる奴もいるから……。ここには、最低限、仕事が滞らない程度しか、人を置いてないんだ。それも、昨日今日と、特に酷い。また、何かあったのかもな。」

そう言って、意味ありげに笑う。わからないことは、薫風に聞いてくれとあって、仮眠をとるため、部屋の隅でごろりと横になる。

ゆりは、目を見張ったが、他にも人がいるので下手な質問は出来ない。

薫風に指示されるまま、筆を走らせた。

となりで、雨水(うすい)が手伝っているのを見止め、じっとそれに見入っている薫風とゆりの目が合う。彼の言いたいことは、わかったけれど、首を軽く横に振って目の前の、手伝いを済ませること

に専念した。

字が、書けるんだ……。

それは、習うことが出来る環境にあったということで、身元を探す手がかりになる。

筆をすらすらと、走らせているさまは、少なくとも、短期間で習得して得たものではない。一人で、その日暮らしをしてきたのじゃ、ないことぐらいは、わかる。けれど、拾ったときに、一度探してもらったのだが、どこにも、それらしき家はなかった。

ゆりは、時々、隣の雨水(うすい)をちらちら、様子を伺うように見ている。

何度目かの時、彼女の視線に、気付いた雨水(うすい)の、何ですか、という顔。

何でもないと首を横に振って、ゆりが微笑むと、安心したように彼もまた、にこにこしている。

返された笑顔に、自分の方がほっとしているのに、ほんの少し、心が揺れる。ゆりは、慌てて、手元の文机に視線を落とす。筆を動かすことに、専念した。

人はいるのに無言の、静かな時が流れた。

「はあ、終わったあ！」

同じく、雨水(うすい)も片付けをしている。もう、外は真っ暗だ。あれから、しばらくすると、横になっていた奴も、起き上がって来て、仕事をし始めた。薫風は、使いっ走りをしているのか、ここには出たり入ったりだ。途中、おやつを貰ったり、ご飯を食べたりで休憩をとったが、その他は、ずっとここに座っている。

「お、よくやったな。えらいぞ。さっき、薫風のやつが菓子を調達してきたから、二人ともどこかで食べておいで。あっちの廂のところなんか、風がよく通って涼しいぞ。」

あの、薫風の同僚だ。

思ったより、子供好きなのか、ふたりに菓子を渡して、場所を指差す。

「ありがとうございます。」

勢いよく、礼を言う、ふたつの声が重なる。室を出て、廂の端に腰掛、並んで座る。

菓子を食べ終わったゆりが、足をぶらぶらさせて、星空を見上げている。

とろき星、からす星、帆かけ星、ふたつ星、すばる星、あめふり星、心星……。

ひとつ、ひとつ、指をさして、ゆりが 星を数える。

雨水(うすい)は、頷きながら、興味深そうにじっと星空を見ている。

「……………」

「？」

ふと、黙り込んでしまったゆりに、雨水(うすい)の不思議そうな顔。

ぼん、と、いきなり、ゆりは庭に降り立つと、暗闇の中に立つ。

顔を上に向けて、ぐっと天に手を伸ばす。

「こうやって、一人で、暗闇に立つと、不安になって、反動で空が輝いて見えて顔を向けてしまう。それで、きれいで思わず手を伸ばしたくなるの。だけど、今度は、沢山輝きがありすぎて、その中の自分の星はどれかって、やたら探したくなったりするのよね。」

「占いですか……？」

「うん。自分のことや、近い人のことは占えないから……。それに、これは気持ちのことよ。」

もっとも、ゆりは、他の方法で占うので、星は好きで見ているだけだが。

「いつも元気だから、迷ったり不安になるようなことはないんじゃないかと……。」

「う～ん。そう言われると、私ってとんでもなく能天気聞こえるわね。」

くすり。ゆりが答えた。たぶん、それは、自分が安心できる環境にいつもいられるからだろう。父や母、兄と、まとのたちのような家で働いている馴染の人たち。ゆりにとっては、大事な存在だ。では、雨水(うすい)は？彼にも、そんな存在があったのではないかと。

ゆりが、ぽつりと訊いた。

「雨水(うすい)は、不安にならない？」

目を見開く雨水(うすい)が、ゆりの目に映る。

「そういえば、変ですね。記憶を失うって、普通不安なことですよ。」

「ですよって……。」

ゆりが驚いている。目の前の雨水(うすい)が、全くようすも変わらず、ちょっと首を傾げているだけなのだ……。雨水(うすい)も、それは不思議な気分だった。ゆりと出遭った日、雨水(うすい)は、街角で、雨に濡れ、ぼんやり座っていた。何も無い、虚ろな目で座っていて、そこへ通りかかった、ゆりと目が合った。「どこか、具合でも悪いの？」声をかけられて、首をふる。「何も思い出せない。」という、ゆりは手を差し伸べて、「じゃあ、家へ来る？大丈夫、すぐに思い出せるよ。」と言って、にっこりと笑った。まっすぐに自分に向けられた視線。あのとき、生まれてはじめて、人と目を合わせた、と、思えた。もちろん、記憶が定かではないからかもしれないが。

「暗闇のなかで、立っていても誰かが側にいると感じられるから、不安にならないのかもしれない。」

いつのまにか、自分も降りてきて、ゆりの隣りに立っている雨水(うすい)が夜空を見上げる。丸くなったゆりの目が、しばらく隣の雨水の姿をじっと見ていたが、やがて瞳が、きゅっと細められると、天の星を映した。

雲ひとつなく、月と数多(あまた)の星が鏡のように輝き、美しい。

「うん。何にも考えなくても、星空って、きれいだよね……。」

同じように見上げる。そのまま、ゆりと、雨水(うすい)は、そこを通りかかった人物に声をかけられるまで、星空を見ていた。

今、同じように星空を見上げる、寄り添う影がある……。

内裏の垣根のうち。人のいない殿社の一画。

「美しいな……。」

天に散らばる光の欠片を見上げる彼女は、美しい。誰も通らない廊下に座り、一人星を見ている彼女に、近付き、大納言が言った。あら、と、冴えた双眸がこちらを見る。

「本当、今日は空の星がよく輝いております。めずらしいですわね。こんな時にお出でになるなど。」

「星ではなくて、そなたのことだ。」

あら、そう？……という返事が聞こえてきそう。ふふっ、と瞳が笑う。

ゆりに似た顔立ち。ただし、大人の女でずっと迫力のある感じの目なざしである。

大納言はむっつりと、隣りに座り込む。昼間のうちに文使いをやって、訪ねることは知らせてある。

大納言は、それが、久しぶりに会った夫に言う言葉かと、こぼしてしまいそうだった。

ああ、どのみち、文句を言いに来たのか、と、心の中で苦笑を浮かべる。

じっと、こちらを見ていた彼女が広げていた檜扇をすぼめる。

「いいかげん。娘のことは、お諦めなさいな。今回は、まだ経験不足で未熟ゆえに、知り合いに頼みましたが、いずれは自分で自分を守れるようになりましょう。あなた様が、関わってはいけない世間に私どもは生きているのです。」

「桔梗。」

大納言はむっ、と、黙った。思いなおしたように、目の前にある艶やかな黒髪をひと筋、手を伸ばしてすくう。

「愛しいと思う者を、そばにおいては、いかんか？そなたも、他に浮いた話もないようだし、私のことを忘れたわけではあるまい。いっそのこと、陰陽師のようなことなど、辞めてこちらに移り住まないか……。」

言葉こそ、少し気弱に聞こえるが、掬い取った黒髪に口づけ、こちらを見た、彼の瞳は自信たっぷりだ。桔梗の気持ちが自分にある、と言っているように聞こえる。桔梗は、ふんと、そっぽをむく。目許が少し赤い。

「それでも、私どものような者は、普通に過ごしたくとも無理なのですわ。どんなに無視しても、見えてしまうものは見えてしまう、ものなのです。それが誰にでも理解できるものならば、問題もないでしょうが、そうではありませんから、なおさら、怪しい者として忌避される存在。一緒にいれば、あなたや養子の時貞さまも、同様の目でみられましょう？」

「そのようなこと……。」

「ないとは、おっしゃれないでしょう？」

何度も繰り返された言葉。それ以上、言葉を紡ぐつもりもなく、桔梗は、満天の星空を振り仰いだ。目を細める。

「今も、私には、あなたの星は、読めませんわ……。」

気持ちを拒絶するつもりはないのだ。桔梗は、言外に今もずっと変わらぬ心を伝える。大納言も同じように、星空を見上げる。口元が緩む。

「うん。出家という手もあるな。世間から、遠ざかってしまえば誰も気にするまい。今しばらくは、時貞も後ろ盾が必要だろうが、その役目が終われば、そなたたちの側にいこう。」

「まあ、気の長い話。期待しないで、待っていますわ。」

桔梗が、大納言の肩にもたれる。さらさら・・という衣擦れの音とともに、彼女の香りが近く感じられる。大納言が彼女をもっと引き寄せようとした時・・・・。

カサッ、カサカサッ・・・！下草を踏み鳴らす音がして、ふたつの影が現われた。

「父上・・・。こんなところで何をなさっているんです。」

ゆりが不快そうな顔をして立っている。うっかり「父上。」と言ってしまったのにも気付かず。

隣の内裏の女房らしき、女が寄り添っているのをじっと不審な顔して見ている。檜扇(ひおうぎ)で顔を隠しているから、誰だか、彼女からはわからないのだ。ぷすっと、ふくれた顔になるゆりの反応に、くすっ・・と、檜扇の陰から笑いがもれる。くすくす・・・うふふ。ばあっと、翳していた檜扇を外す。

「えっ？え～！母上。どうして・・・どこかのお屋敷へ泊り込みのはずじゃ・・。」

「これ、大きな声を出すな。」

大納言が慌てて嗜める。まわりに、人がいないとはいえ、内裏の中だ。いつ誰が通りかかるかもしれない。ゆりが、口に手をあてて、小声でもう一度問い返す。だが、考えてみれば、桔梗がこれまで仕事の内容を詳しく話すことはなかったことを思えば、これも不思議はないことなのかもしれない。心の中の思いが伝わったのか、桔梗はあえて説明するでもなく、うんと頷いただけだった。おいで、おいでと手招きする。ゆりについて来た、もうひとつの人影・・・雨水(うすい)を見て口の端をあげ、微笑む。

「雨水(うすい)。やんちゃ娘に付き合わされて苦労しますね。そなたは、何か思い出したことはないですか。」

「いいえ、お方様。ゆりさまには拾っていただいた恩があるから、あたりまえのことです。」

「雨水(うすい)は、良い子ですね。そなたの笛が、随分と役に立ったと、昼間薫風どのが来て言っていた。天分があるなら、このまま思い出さずとも、陰陽師として身の立つように、学ぶとよい。私も、今の仕事が片付いたら、師を紹介しましょう。」

「・・・・ありがとうございます。」

「不服ですか？」

「いいえ・・・私がいなくなるとまた、人手が減るのではないかと・・・。」

桔梗が微笑んで、雨水(うすい)の頭を撫でた。ゆりの方をちらっと見る。

ゆりがぱっ、と顔を輝かせて、頷く。

「家だったら、いつものことだもの、大丈夫。それに、雨水(うすい)だったら、きっと、いやな同業者にならないから、賛成だわ。」

「雨水(うすい)。どのみち、まだ、かかるから、しばらくはゆりのことお願いね。」

「はい。」

雨水(うすい)が頷く。桔梗がゆりたちにここにいるのはどうしてなのか、訊ねる。

「そうだ。この辺りに、右近さんて女房がいるから、文を渡してくれと頼まれたんだけど。」

ゆりが、文を見せる。

「あら、誰からかしら・・・。」

すっと、細い指が、ゆりからその文を取り上げ、開く。

「あっ。母上。」

「右近と呼ばれているのは、私ですよ。」

うっ、と、引きつったような顔のゆり。

「・・・そう。陰陽寮の人からよ。名前を伺ったけど、中を見ればわかるからって。」

薄様の紙で、風流めいた文のように見えるが、恋文などではない。桔梗の難しそうな顔を見ればわかる。ふうっと、溜息をついて、顔をあげた。大納言と目があう。

「ああ、残念。今夜はゆっくり出来ると思っていたのに・・・お仕事ですわ。」

今日も、呪いの主との戦いである・・・。追い払っても、追い払っても、仕掛けてくる。人外の気配がして、呪いの主の目的は不明だ。ここは、当然、内裏の陰陽寮から、それを防ぐ為に人員が割かれているのだが、持久戦のような日々に正規の陰陽師たちが減っていく。桔梗たちのような伝のある者も呼び出されたのだ。今日もまた、ひとり過労で倒れた。防戦一方では、終わらない。桔梗は、じりじりと夏の不快な暑さに包まるような気分を抱いた。気を取り直すように、娘のゆりに微笑む。

「ゆり。もう、薫風どこのもとへ戻りなさい。決して一人で先走ってはなりませんよ。あなたは、少し慌てて行動することがありますからね。」

「わかりました・・・。」

踵を返しかけたが、ふと、振り返って、大納言を見る。

「えっと・・・右近衛の陣の座って、どっちですか？」

「時貞に、用があるのか。わしも、ここにいても仕方がないから、連れて行ってやろう。もっとも見回りに出ていたら、いないかもしれないがな。」

大納言が庭先に降りてくる。見送る桔梗と目を見交わし、背を向けて歩き出す。ゆりたちも後を、追った。

程なく、ついた陣の座は、人気も少なく見回りに出払っているようだ。

そこで、奇妙に動く小さな影を見つけた。それは庭から、ひょいっと飛び上がって中へはいり、揺れる灯火に映った影は荷物のようなものを抱えて人気のない、室で包みを広げる。むしゃむしゃと、ものを食う音がする。

ぴこぴこ・・・耳？動く影には長い耳がついている。

「はあ。うまかったあ・・・。やはり、ここは旨い菓子が豊富にあって目をつけた甲斐があるのだ。」

うさぎの盗人・・・？盗人にしては、かわいげな。物の怪にしては、間抜けな感じの小さな二本足で歩くうさぎが、今は床の上に満腹の腹を抱えて転がっている。

室には灯火がひとつ、点いているだけで、薄暗いのでゆりたちのことに気がつかないのか。本当に間抜けな物の怪だ。ゆりは、足音を忍ばせて近付いた。

ぱっ、と耳をつかんで、持ち上げる。

「な、人間いつの間に・・・。」

「ずっと、いたわ。間抜けな奴ね。あら・・・真っ白で意外とかわいい。」

耳を掴まれて持ち上げられているので、逃げられない。硬直した物の怪うさぎは、じっとこちらを見ている、ゆりの目にびくっ、と、体を震わせる。

「真白。お前の名前は、真白ね。」

つぶやくと、一瞬ゆりの目が剣呑に光ったような気がして、真白と名付けられた、物の怪は、金縛りにあったように動きを止めている。ゆりの人指し指が、物の怪の額にふれ、額に、ゆりの花の模様が浮かんで消えた。

「うおっ。何する、離せっ。」

ばたばた暴れだした物の怪は、手を離してやると、床をつるつる、すべって焦りながら逃げていく。姿が見えなくなったところで、ゆりが口を開く。

「真白。出でよ。」

すると、ゆりたちの目の前に、うさぎの物の怪が現れる。訳が分らず、物の怪は、きょろきょろ、辺りを見回す。

「お？ぬおお・・・っ！何で逃げられんのだ。」

「あんた、今日から私の式神決定ね。」

「何だと。俺様を誰だと・・・。」

真白はしばらく抵抗して、文句を垂れていたが、ゆりが懐から、菓子を取り出すとそれに釣られて静かになった。

「家に来たら、こそこそ盗まなくても、食べさせてあげる。」

よしよし、と普通の小動物にするように頭を撫でる。真白は、不機嫌な顔をしたが、「餅。」

と一言、言ったゆりの言葉に、ぴくりと耳を動かし、大人しくなる。

「こんな、物の怪を飼ってどうするのだ。」

「父上。式神です。これで、家の用事をこなせば、皆助かるでしょう？」

「……………」

ゆりと大納言の会話を聞いていた雨水(うすい)が、急にくるりと後ろを振り返る。

気配が伝わり、人が戻って来たようだ、と。彼に促されて、振り返ると、時貞とその朋輩が戻って来るのが目に入る。薫風も連れてくる。童子達が二人、ここに来ているのは、あらかじめ分っていたことなのか驚かなかったが、大納言がいるとは予想していなかったようだ。

「この童たちが、迷っていたのでな……。」

大納言は、宿直でもないのに居残っていた理由は、別として、ここにいる訳はとりあえず話す。時貞も、その朋輩も、こんな夜に何の用事で居残っているのかなど、野暮な質問はあえてしないが、いかにも新米らしき、お使い童を見て、朋輩は納得している。彼は、薫風を示すと。

「そうでしたか……。君たちが帰ってこないのが心配して探しに来てくれた人といっしょだよ。」

薫風は笑っている。笑ってはいる、が、独特の彼を取り巻く冷たい雰囲気、見えそうだが……。あちゃあ、怒っていると、心の中でゆりは思った。薫風はあえて事情を知らない人間のために言った。

「どうも、お手数をおかけしたようで、すみませんでした……。この童たちは、上司から預かっている子たちで、事情を知らない同僚が文使いに使ったようで……。慌てて探しに来たんです。これでも、大事な戦力なので……。」

「え……というと。」

「内容は申せません。」

とはいえ、訊ねた相手も、役目が近衛ということは、かなり家柄の良い子弟しかなく、当然のことながら情報を手に入れやすい立場の者たちばかり。うすうす、何が、起こっているのかは知っている。陰陽寮が総出で、どうやら正規の者以外も動員して、呪いを防いでいるらしいことに、思い至って頷く。どうやら、納得してくれたらしい。

それを見とめると、すかさず、ゆりは文を時貞に渡した。人がいる場合を考えて、あらかじめ用意しておいたのだ。それを、受け取って、懐にしまい、大納言にむかって、時貞が報告する。

「そう言えば、ここ、二、三日、小さな盗難が続いてるんですよ。それが、盗難といえるかどうか、あやしいことなんです……。」

内裏に仕える女房たちの局から、取り置いておいた菓子が消える。はじめは、誰かが間違っただけで済んだのかと、思っていたが、同じような件が続くと、やはりおかしい、と噂になっていた。菓子など、庶民にとってはめずらしい食べ物だが、ここに仕えている女たちは食うに困るような家の出の者はいるはずはなく、菓子ばかりに執着しているのも妙な話だ。また、金目のものとも言えないので、盗賊の仕業とも言えない。

聞き終わって、大納言が頷く。

「そのことなら、もう心配あるまい。」

ちらっと、ゆりに抱かされているうさぎの姿をした、物の怪を見る。

「こそ泥の、物の怪のことなら、解決しました。きっともう、出ないはずだから、安心してください。」

にこっ、と、ゆりが笑う。

薫風が、じっとゆりの手に抱かれたうさぎを見ている。

真白は横目に彼の視線を受け止めると、一瞬びくっ、と震えた。

「文月、良いもの、拾ったな。」

時貞やその同僚が、怪訝な顔をしていたが説明することもなく、薫風が童たちのかわりに礼を言うと、二人を連れて去っていく。

見送って、時貞の同僚がつぶやく。

「食い意地のはった物の怪をあの子たちが、たまたま、退治しちゃったってことか？あんな、元服前の子供がねえ、普通の子に見えたけれど……。どうも、あそこの連中はよくわからん奴が多いなあ。」

ちらりと時貞を見た。彼は、曖昧に頷く。

それから、少し人気のないところへ移動しようとしているから、さっきの童が文使いの途中で頼まれた、という文を、読むためであろうと納得した。彼が女房たちから文をもらうのは、別段珍しいことでもなかったもので、取り立てて興味をひくこともなく、その同僚も休憩をとるために、後から戻ってきた者と、雑談しながらゆっくりしている。

大納言も、しばらく、若い者と話をしていたが、あまり上位の者が長居をすると、彼らも、ゆっくり休むこともできないからと、執務をとるための局へ戻ることにした。

出て行く大納言と戻ってきた時貞がすれ違うとき、時貞がまわりにわからぬように、ゆりの渡した文を大納言に渡して何食わぬ顔で仲間のところへ行っ、雑談に加わっている。

大納言は、持ち帰った文を開けて、また、ひとつ難事が加わったかもしれない予感に渋い顔でその夜を過ごした。

その場所の、広い板の間の上には、赤い線で円陣の中に御芒星が大きく描かれていた。

御芒星の先端には、それぞれ人が座っている。

それぞれの官位によって定められた色の袍に、身を包んだ人の中に、女房装束を身につけた桔梗も混じっている。中心には、彼らの守る人物。ここ梨壺の主、東宮、その人。その側に、陰陽師たちの指揮を執っている人物、陰陽寮の助(すけ) (頭(かみ)の次の次官) も座っている。

突然、彼らを取り巻く、部屋の空気が変わる。

暗雲立ち込める中で、一瞬の緊張が高まる。

陰陽の助が静かに言い放つ。

「来るぞ。」

全員が気構えると同時に、事は起こった。

しゅるしゅるる・・・っ！空を切り裂く風が起こり、こちらに向かってくる。

「破っ！」

それぞれの場所で、印をきり、術を破る声がある。円陣のすぐ側で、風は堰き止められ、勢いよく、上へ跳ね上げられ、ばすっ、と音を立てて爆発し消える。消えたあとから、白い人型の紙が、ゆらゆらと舞い落ちる。

何度も、風が襲って来るとは、円陣のまわりのあちこちで、白い紙が舞い落ちた。攻撃は、単調で、時間差をおいて、また、やって来る。

「助どの。行方は・・・まだ、探れませんか？」

円陣を守っている一人に、焦った声があり、相手の場所を占っている、陰陽の助の額に汗が浮かんでいる。また、今宵も駄目か・・・。こんなに何も卦が出ないのは、陰陽の助とて、初めてだ。急がなくては、また、夜明けとともに、攻撃は止む。だが、時を急ぐその焦りすらも、占いにとっては致命傷になる。彼は、すべての邪念を振り払うように、卦を立てることに集中した。

だが、何も出ない・・・。やはり、駄目だったか。

虚しく明けの鳥が、どこかで鳴く声を聞く。

陰陽の助は、ふうっ、と息を整えると、中心にいる東宮に向かって、平伏した。

「申し訳ございませぬ。今夜もまた・・・」

からっ、と、手許の音に、気をとられて、言葉が途切れる。それが手許から転がり落ちて、一つの象を造る。反吟の卦。何故これが・・・。天地が反吟し、占い事は、必ず、死人を見る。父にとっては不幸な子が出、君にとっては不順の臣が出るという、内容を象徴している。今、彼が占っているのとは、内容の異なるものだ。手を伸ばしてしまい、うっかりと触れてしまった瞬間・・・。

「水・・・鬼・・・いや、天后・・・何だ、これは・・・っ。」

渦巻くイメージがいったんに、頭の中に浮かび上がり、陰陽の助は気を失ってしまった。

駆け寄り、介抱をする人。これを知らせに、帝のもとにいる陰陽の頭(かみ)のところへ走る人。残った人形(ひとがた)などの呪符を始末するため残る人・・・今夜の戦いは、混乱の中で幕を閉じた。

青々とした緑の葉に日が燦燦と降り注ぐ。

夜中に続いている影の戦いなど知らぬげに、御簾で隔てられた廂の廊下を時折通り過ぎる公達。御簾の中から、こぼれる色鮮やかな重の袖の前で、足をとめ、しばらく談笑していく姿も見える。蒸し暑い京の夏も、あと少しで影をひそめるかと思うその頃・・・ゆりは、御簾の中から覗いた一際、鮮やかな色の袖の前まで行って、中に声をかける。

「えっと、こちらは、衛門さんの局ですか？」

御簾を上げて中から人が出てくる。

「そうよ。あら、まあ、ありがとう。あなたは、最近よく見かける子ね。文月、というのだけ？とても、見目のいい子がいるって、女房仲間が言ってたわ。どなたに仕えているのかしらね。」

「・・・・・・・・。」

衛門は、さすがに内裏女房だけあって、華やかな雰囲気を持っている。質問しながらも、受け取った文のほうに興味がそそがれているので、返事がないのも気にはならないようだ。ゆりの手から、綺麗な紙に書かれた文を受け取り、うれしそうに開いている。

「ちょっと、待っていて。」

中へ、引っ込み、しばらくすると、彼女から返事の書かれた文をゆりは受け取る。

「お願いね。」

彼女は、そういうとゆりに「あとで、食べて。」と、唐菓子をくれた。きびすを返して、立ち去ろうとすると、顔見知りになった女の童が出てきて、ちょっと、立ち話になった。すると、その子を使っている女房が出てきて、これまた、「なるべく、目立たないようにこっそり渡して。」と言われ、使いを頼まれる。そんなふうに、あちこちでついでのお使いを頼まれ、ゆりはここに来てから、とても忙しく過ごしている。雨水(うすい)は、陰陽寮で手伝いをしながら、薫風が勉強も見ているから、ほとんど詰めっきりなのだ。

ゆりは、こうしてお使いを頼まれたりしながら、世間話に自分の知りたい情報が出てこないかと、あちこち探りがてら、まわっている。

午前の公卿たちの会議が終わったようで、高位の彼らがのっそりと、廂を歩いてそれぞれ思い思いに、去って行くのを見かける。陣の定め、といわれる会議は、左大臣以下、右大臣、内大臣、権官を含め、大納言、中納言、参議まで、今でいう、閣僚会議、会議の決定はそのまま政策となるので、国会も兼ねているといったところか。

ゆりは、その中に父の姿を見つけた。じっと見ていると、その視線に気付いたらしく、ちらりところちらを確認する。大納言は、さりげなく用を思い出したふうに、人のいない方向へと歩き出す。歩き出したとき、ゆりにだけ、判るよう、ちょいちょいと袖が動いたから・・・、ついて来い、と言っているのだ。

人気の少なくなったところで、ゆりは、思い切って、声をかける。

「大納言様。内大臣さまって、どの方ですか？まだ、中に居残っておられますか？」

庭から、廊下の欄干に、掴まるようにして、ぴょんぴょんっ、と、飛び上がって姿を見せる。中に

まだ、人が残っているようなので、ついでに最後に残った文を渡すために、訊いてみた。

顔見知りの童が人を訊ねているのへ、大納言が足を止めて、わざわざ、その場に座って下を向いて親切に答えてやっている、と、そんなふうにとったのだろう。そばを歩いていた者も、取り立てて気にするふうでもなく、通り過ぎてどこかへ行ってしまった。中から、居残ってしゃべっている者が出てこない限り、あたりには人気がない状況になる。

「また、使いを頼まれたのか。近頃よく見かけるが、内裏の若い女房たちが可愛い子がいるというので、人気だとか……。で、何か知りたいことは、つかめたのか。」

大納言は、複雑な表情をしている。

「あんまりね……。余計な情報ばかりで、誰と誰とが、つきあってるとか、そんなのばかり……。昨日なんか、二股かけてるのとか、わかっちゃったりして、こんなの知っちゃってどうしようとか……。って、思っちゃうわ。どっちかって言うと、御厨とか、下働きの人達の話のほうが、興味深いのがあったんだけど……。」

ゆりは、苦笑いしながら答える。言葉を濁したのは、その続きをまとめるのは長い話になりそうで、いつ誰が通りかかっても、おかしくない状態だからだ。

「そうか。まあ、無事ならそれだけでいい。」

大納言が頷いていると、その背へ声がかかった。

「左大臣だ……。」

こそっと呟くように小声でゆりに教える。左大臣は、もう頭の真っ白な、じいさんで、よろよろという感じで、こちらへ、寄ってくる。顔色がずいぶんと悪い、健康状態の良くなさそうな男だ。

「卿に、こんな子息がおったとは……。」

左大臣は、ゆりの方を見ている。基本的に子供は内裏に出入り出来ないけれど、殿上童という例外もある。

「文月ですか？いえ、この子は、使いを頼まれただけの子で……。たまたま、顔見知りだから、人を尋ねられただけです……。」

「何だ。私の勘違いか。ふと、こちらを向いた時の、雰囲気似ていると思ってしまったのだ。すまん。」

「いえ。文月くらい、しっかりした子がいれば、うれしい限りですが、こればかりは縁のものですから……。ところで、少し顔色が優れないようですが。」

話を逸らそうとした大納言に、首を振ってまだ、左大臣は、しつこく文月に興味を持っているようだ。少し顔色が悪いくらいではない、目のまわりが黒ずんでいる。異様に底光りのする目で、ゆりの方を見ている。

「では、誰が召し使っているものだろうかの。」

「さて……。」

大納言は、適当に言葉を濁して終わらせるつもりでいた。ゆりの言葉が割って入る。

「あの……。内裏で働いているわけでは、ないです。大内裏……。外の陰陽寮の方から、使いをした、帰りに色々頼まれてしまいまして、うろろうしちゃ、いけませんでしたか？」

陰陽寮と訊いて、一瞬ぴくりと反応したが、さすがにすぐに、平静になって、左大臣が答える。

「私的な文使いくらいは、まあ、構わないだろう。・・・なんだ、そうか・・・。」

つぶやき、あっさり去っていく。向うの方で、一度、足を取られてふらついた左大臣の背中をじっと大納言が見つめている。

「はて・・・感じが変わったような・・・。」

もっと傲慢と印象を与えるくらい、見た目も、押し出しのいい感じだった。今も、確かに、感じがいいとは言いがたいが、どこか心ここに在らず、といったふうで、会話の切り上げ方も変だ。ぷつりと、意識が、逸れてどこかへ行ってしまった、そんな感じだ。途中から、側にいた、大納言の視線を全く意識の他においているような・・・。大納言は、ゆりと顔を見合わせて、首を竦めた。

「この間、薫風師に連れられて行ったところ、って、あの左大臣さまの娘の女御さまのもとだよねえ・・・。」

ゆりは、彼が去って行った、方向を見ながら、つぶやく。

「女御さまのもとに、また、何で？」

「うん・・・。具合が急に悪くなられたとかで、陰陽師のお仕事でお供したの。悪い気にあたられて・・・」

ごほんっ。父の咳払いの音がして、はっと上を見る。ゆりの方を興味深げに見ている知らない視線がある。彼は、文使いの童を面白そうに見て、微笑する。

「そんなことが、あったのか。」

「あ、でも、そんなことは、よくあること、ですし・・・。」

物の怪の気にあてられて、祓うために陰陽師がよばれることなど、よくあることだ。

「ふん。そうかもしれないが、あのお方の様子じゃ、被害が大きかったんじゃないか。その師の薫風とやらは、腕は本当にいいのか？」

にやり、と、笑うのへ。

「ええ。確かです。」

「そうか、では、そのうち回復に向かわれるのかな・・・。」

言葉の割には、残念そうに聞こえるんですが・・・。

ゆりは、まじまじと相手を見ている。

「あの・・・。」

「文月。探していた内大臣さまだ。」

戸惑う、ゆりに、大納言の声それが文使いを頼まれた相手だと、教えてくれる。

顔を半ば引きつらせながら、頼まれた文を渡すと、礼を述べて去って行った。

「年毎に人はやらへど目に見えぬ 心の鬼はゆく方もなし・・・だっけ。感じ悪い人だねあの人。」

節分の鬼は祓ったって、祓えない、心に住む鬼ばかりは、どうしようもない。思わずつぶやくゆり。どこで覚えたのか、普段は口にもしないくせに、こんな和歌だけは知っているんだな、と、苦笑している大納言へ、今日は、家の方へ帰ると言って、人が来ないうちに、きびすを返して立ち去る。

※ 『 年毎に 人はやらへど 目に見えぬ心の鬼は ゆく方もなし 賀茂保憲女 』

毎年毎年、（鬼やらいで）鬼に扮した人は、追っ払えるけれど、目に見えない心にある鬼ばかりは、どこへも追ひ払う先がない。作中の和歌は、私歌集に見えるらしい。

ネタ元は、こちら、 <http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin.html> から。

ぱたぱた……。廊下を駆けるように移動していくゆり。

廂の廊下に面した長局で、机に座って書きものをしている薫風を見つける。

そばに、雨水(うすい)がいるが、これは何か書物を開き、薫風が片手間に教えている風景が目に映る。

この間まで、まだ、数人いた同僚たちも、まったく姿が見えず、ここで仕事をしているのは薫風一人。

「あれ、一人だけ留守番なの？」

ゆりの質問に薫風が頷く。

「まったく誰もいない状態に、するわけにもいかないだろう。もうすぐ、交代が来るから、そうしたら、ここを出よう。ところで……。」

使いに行ったきり、ちっとも帰って来なかったことは、薫風も咎めない。ゆりも、誰もいないので、集めてきた情報を堂々と話せる。雨水(うすい)も顔をこちらに向けている。

「あのね。唐車なんだけど、見た、って人がいて、場所が色々あって、とりあえず走っていった方向とか、総合してみたんだけど……。どうも、嵯峨野の方角なんじゃないかと思うの。でも、その先はどこへ向かっているのか、わからないわ。」

「その見たってというのは？情報源は？」

「雑使女の人たちとか、大内裏のあちこちで雑役を受け持っている人達……。と、物貰いのおばさんも、いたわ。」

「……。よく話かけたな、ゆりどの。結構おかしい奴も出入りしているから、気をつけろよ。」

「え、だって、大きな堀に囲まれた家の人達じゃ、外の気配とかわからないじゃない。」

そのほとんどが、横になることが出来るだけのスペースしかないような、小さな家の住人だ。物貰いにいたっては、雨風が防げるだけの場所を確保しただけで、外の気配の変化は、直に、感じられるはずだ。

「そうなんだがな……。」

やれやれ、その危険を指摘するだけ無駄かと、薫風も諦める。話の続きを促す。

ゆりが聞いてきたものに、もうひとつ、あきらかに怪異に関する話があった。

「どこのお屋敷のか、忘れちゃったんだけど、その牛飼い童の所属している組合で、宴会があって……。」

彼らには、同業者でつながる仕えるお屋敷を越えた横のつながりがあるのだ。

いくつか、組があるので、京中の牛飼い童が集まるわけではないけれど、集まる時には、広い場所がある。

彼らの住む小家では、皆、入りきれないので、よく打ち捨てられたお屋敷なんかを勝手に使っていた。

広い庭があるので十分酒を飲んで、わいわいやれるからだ。

その夜も、どんちゃん騒ぎをしていたら、どこからか、賑やかな行列が通る音の、気配が近付いて

来るのが分った。そこは、荒れ果てた右京の方だったので、こんな夜中に公卿の車が通るのも、珍しく、それに、夜の夜中にここまでの、行列を伴なって仰々しく出かけるなど、おかしい。

車の輪立ちが、軋む音が聞こえて、不審に思った一人が、崩れた築地の影から、のぞいてみた。一瞬のち。「ぎゃあ〜！」と、その仲間の叫び声に、皆が集まり、同じように覗いて見る、と、そこには・・・。

鬼の行列・・・。唐車に供奉する公卿たちのように、賑やかに通り過ぎていく。夜風に揺れた御簾から、中が、ちらりと見えて、銀色の長い髪と流れ出た、美しい、裳裾が車からのぞいていた。蒼白になった牛飼い童たちは、その場所で身動きも出来ず、朝まで、じっと固まっていたという。

「それで、その鬼の、どれかが、乙訓へ・・・都へと言ったのを、確かに聞いたって。」

「乙訓？・・・長岡京か。ふん、唐車で、鬼の都の帝にでも、入内するのかな。」

薫風は、半ば冗談で言っている。ゆりも、雨水(うすい)も、笑った。雨水(うすい)が、ちょっと首を傾げる。さっきの、嵯峨野の方向に唐車が向かっている、というのも、ずいぶん遠回りだが、道が繋がっていないこともない。

「行って確かめてみるというのは、出来ないでしょうか？少なくとも、鬼が沢山住んでいる所がある、ということですよね。」

打ち捨てられた、寂しい場所というのは、確かに、影になるものには居心地がいいかもしれない。長岡京は、造営されてまもなく、平安京へ移ってしまったので、寂しい場所の例にもれない。多くの鬼がいるということは、危険が予想されることなどで、薫風としては、避けたいとこだ。

「それと、今、懸念していることと、関係あるかどうかは、わからない。あの左大臣宅で、出遭った女と、結びつくことか？」

「それは・・・そうなんだけれど、もしかして、攫われた姫君たちには、関係あるんじゃないかと・・・。」

ゆりが、唐車を見た日、また、ひとり姫がいなくなったのだ。

「・・・。。それは、上に報告しておく。二つの件を片付けるのは、無理なことだ。」

薫風に言われ、仕方なく引き下がる。ゆりも、雨水(うすい)のことが気にかかっているのに、さすがに、首をつっこもうとは、思っていない。

夕暮れ時に交代が来て、薫風たちは、外へ出た。堀川にかかる橋のたもとに来た時だ。

川沿いの涼しい風に三人とも、目を細める。ふと、思いついて、ゆりが真白を呼ぶ。

「お使いで、あちこちでおやつを沢山もらったから。」

「むうう。ペット扱いは、やめるのだ。俺様の力は、本来はすごいのだぞ。」

「こそこそ、身を隠して、お使いぐらいしか、出来ないじゃない。・・・いらなの？」

「む、いる。」

もごもごと、うさぎが、二本足で歩きながら、菓子を頬張りついて来る。

「力玉さえ、戻れば・・・。」

という、小さなつぶやきを聞き逃さず、ゆりがきつ、と振り返る。

「何それ。」

「・・・・・・・・。」

「真白。話せ。」

「うっ……。鬼の力の源なのだ。うっかり騙されて、取られてしまった。」

「なるほど・・・。」

がくっと、耳を垂れうなだれる真白。ちょうど、橋を渡って中程に来た。

雨水(うすい)が思い出したように、言う。

「そう言えば、怪異に関わる故事って、場所が、橋に関わるものが多いですね。」

ゆりが、頷く。

「橋姫とか・・・？水辺で、不安定な場所だから、かしら。けど、結構、陰陽師とかが、占者を求めてやって来る人を目当てに、屯してたりするから、その話どうなのかしらね。」

橋の真ん中に来て、欄干から川を臨み、頬にあたる涼を楽しむ。怪異の話をしていると、向こうからやって来るというのは、本当なのだろうか。・・・・・・・・。

薫風の表情が厳しくなる。一瞬遅れて、ゆりも雨水(うすい)も気付く。

「！」

橋の向こうから、唐車が・・・・・・・・。牛飼い童の話の通り、鬼の行列が供奉している。

それらと、橋の上で対峙することになってしまった。

薫風がすばやく、自分たちのまわりに結界をつくった。橋の真ん中に、小さな円形の結界が張られる。そうしている間に、鬼たちがどんどん、近付いて、こちらへ、押し寄せてくる。結界の周りだけ避けて先へ進むから、囲まれた、かたちになってしまった。鬼達は、ぎゅ、ぎゅ、と詰め掛けて、まわりの結界を壊そうとしている。あまり頭は良くなさそうだが、多勢に無勢というか、息苦しさにと、にらみ合いでどれだけこちらの集中力が、続くかといったところだ。近くに止まった唐車も、揺れて御簾が捲くれあがりそうだ。

雨水(うすい)が、何かに気付いたらしく、指を差す。

「あれ。誰か、乗ってます。」

そう言ったとたん、御簾を跳ね除けるようにして、女が飛び出そうとしている。泣きながら、飛び出そうとする彼女を、細い腕が伸びて掴んで引き戻そうとする。

「あの、姫君、この間の・・・」

正親町のお方さまのところの姫だ。ゆりが、驚いて一步踏み出し、そのまま駆けて行ってしまいそうなのを、薫風に制止される。姫君を捕まえているのも、袿を着ている女には違いないが、どんな者かは、はっきりとは確認出来なかった。

「薫風・・・こうしていても、終わらないし、あの姫君を助けてあげたいの。」

ぎしぎしと、橋が軋む音が、聞こえている。薫風は、考えを巡らせている。口を開いた。「わかった。あの唐車の前までの鬼を蹴散らすから、乗り込んで、姫と一緒に川へ飛び込め。」
「うん。ちゃんと引き上げてよね。」

「雨水(うすい)。これを適当に振り回して、周りの鬼達に、捕まらないようにしている。結界を一度解く。」

薫風は、懐から、小刀を出して渡す。

「いくぞ。破っ。」

結界が消えると同時に、ゆりは駆け出す。薫風が印を結ぶ。すると、風が、囲んでいる鬼達の間を素早く駆け抜け、遠ざける。ゆりも、式神の、真白に、鬼達を蹴飛ばすように命じる。それでも、近付いてくる鬼たちに、自ら蹴りをいれ、遠ざけながら、進む。唐車の前で、ゆりの頭の上から、小鬼がジャンプして取り付こうとしていた。しゅっ！雨水(うすい)の手に在る、小刀がそれを切り裂く。すんでのところで間に合った。

「ありがとう、雨水(うすい)。」

「ゆりさま。早く！」

促されて、目の前の御簾をぎゅっ、と掴み、思いっきり引き千切る。ぎりぎり、と何とも言えぬ嫌な音がして、御簾は剥がれ、飛ばされる。

姫が羽交い絞めにされているのが、目に入った。涙に濡れた姫の瞳が、ゆりを見ると大きく見開かれる。

乗り込んで、印を結んだ、ゆりが、姫を捕まえている、鬼を蹴散らそうと、術を使う体制に入った。銀色の長い髪をした女だ。ゆりの母親ぐらいの年だろうか。向うも、目を見開いて、こちらを見ている。ふいに、その手の力が緩んだのか、捕まえている、姫の体が前に傾いだ。

その機を捉えて、ゆりは、姫の腕を掴んでぐっと引っ張る。意外にも、するっとこちらへ倒れてくれるのではないか。

ゆりは、姫の体をぐっと引き寄せて抱き寄せることに成功する。

「待ちや。姫を姫を・・・返せ・・・。」

うわ言のような言葉を呟きながら、銀の髪の女が、はっ、と気付くと、取り返そうと手を伸ばす、その手を、ゆりが危険だ、と、見た、雨水(うすい)がばしっ、と掃う。

自分の手を叩いた、雨水(うすい)の姿を、銀色の鬼の瞳が映す。いぶかしげに、細められる。

「・・・同じ匂いがする・・・。」

「えっ？」

動きを止めてしまった、雨水(うすい)。鬼の手が、彼の手首を掴む。

そこへ、いらいらした、薫風の声が飛び込む。

「早くしろ！ゆりどの。雨水(うすい)！川へ飛び込めっ！」

雨水(うすい)が慌てて、きびすを返そうとする。そうはさせじと、掴まれた手首に力が入る。

ゆりが、近くで鬼を蹴飛ばしていた、真白の足を掴むと、ぶんっ、と、鬼の顔めがけて投げつける。

「真白ごめんっ。」

「おわっ。」

ばしっ、と、鬼の顔に命中する。同時に、雨水(うすい)も持っていた小刀を鬼の腕に突き立てる。ぎゃっ、という鋭い声とともに、手が外れ、雨水(うすい)は難を逃れた。欄干の姫の背を押して、上へ、上らせるのに苦労している、ゆりに追いつき、先に欄干の上に飛び乗って、姫を引き上げ、ゆりが上ったのを確かめると、共に、川へ飛び込む。

それと見届け、薫風のまわりに風が起こる。ぐるっ、ぐるぐるっ。彼の周りの橋板を円く切り取り、橋がそこだけ残し、ばらばらと、音を立てて崩れていく。唐車も、鬼達も空中へ零れ落ちていく。

「藤っ！」

水の中に落ちて溺れそうな、ゆり達の体に藤蔓が巻きついて、ずるずる・・・と、川岸へ引き上げた。薫風もその後で、藤蔓を使って川岸へ着地した。

げほっ、げほ、げほっ・・・と、咳をしながら飲み込んだ水を吐きだした。ゆりも、雨水(うすい)も姫も、すぐに引き上げられたので、それほど水は飲んでいなかったが。

「あの・・・ゆり姫さま、よね・・・。」

落ち着いてから、遠慮がちに、戸惑う姫の声がする。ゆりが、えへへと、首を竦めた。

「あ～あ。ばれちゃった。どうしようかなあ・・・。」

とりあえず、真白を呼ぶ。

後ろ向きにお尻を向けて出て来た、式神に、ゆりが、うっ、と、なる。

「真白っ。ごめん、慌てて。」

「飛べとか、何とか言えばいいのに・・・。風になれとか、格好いいのに・・・。」

ぶつぶつ言っている、式神に、謝りたおして、機嫌を直してもらい、ゆりの家へ使いに行っても

らう。父か、兄か、どちらか帰宅している方にここへ迎えに来てもらうように伝える。しばらくして、時貞がやって来た。当然、警護の平太や牛飼い童などは、ゆりの秘密を知っている者だ。車へ、ゆりと姫を乗せると、馬について来ていた時貞の後ろへ、さすがに疲れきっている雨水(うすい)を乗せて、姫の家へ連れて行く。ずぶぬれの姫も、ゆりも、着替えをさせられるために、一旦、説明は後回しにされる。雨水(うすい)も出してもらった着替えを着て、お方さまのところで説明をしている、薫風と、時貞のところへ行く。複雑な表情で、頷いているお方様のところへ、姫の着替えが済んだと報告が来て、場所を移した。

「お母様・・・。」

「よかった、無事で・・・。」

娘を抱きしめた、お方様は、ゆりたちに頭を下げて、ありがとう、と、礼を言う。

「このことは、誰にも、口蓋はしません・・・。ゆり姫、また、遊びにいらしてね。」

「あの・・・。」

てっきり、敬遠されるかと思ったゆりは、戸惑う。

あちらの、姫がにっこり、微笑むと、ゆりの手をとった。

「助けてくれて、ありがとう。また、お会いしたいわ。」

「あ、うん。」

ゆりの気持ちに気付き、そう言ってくれたのだ。頷いて、約束して、その家を辞した。

家に着き、車から降りる時、時貞に手伝ってもらいながら、ゆりが言った。

「あのお方様と姫君って・・・良い人だったね。」

時貞が、ちょっと首を捻りながらも、同意する。彼女が、今何を思って、そんなことを言ったのかが、わからない。ゆりは、普段、自由に外出したりして、それこそ庶民の子と変わらない生活を送ってはいる。けれど、友達になれる子は、少ないのだ。皆、彼女が、陰陽師と係りあると知ると、一歩引いてしまう。彼女自身が呪いをかけるわけでもないのに、連想されるだけに、気味悪がられて敬遠されるのが、常だ。隔てを置かれないのは、貴重な出来事だった。

「そういえば、兄上も、私と母が、陰陽師だってこと、気になさいませんよね・・・。」

「私が、はじめて、この家に来た時のこと、覚えているかな。」

時貞が、目を細める。

その日は、ゆりに兄が出来るからと、父に連れられて、ゆりもこの家に来て待っていた。ゆりは、まだ、幼児の域を出ない頃だ。時貞も、まだ童形で、子供だ。やって来た子供に、小さな、ゆりは、ぱたぱたと走り寄って、ぴょんと、飛びついたので。子供は、びっくりして、自分にぶらさがっている、幼児をみている。幼児の丸丸とした頬が、うれしそうに笑い、子供は歓迎されているのが分ると、ほっとしたような表情をしたのだった。

時貞が、ゆりの頭を撫でた。

「受け入れてもらえるのって、うれしいよな。それまで、私は余計な、子どもという存在だったから、小さなゆり姫に歓迎されて、正直、ほっとしたんだ。ここでは、父上にも大事にさせていただいたし、そのきっかけをくれたのは、君さ。」

彼にとって、それ以上のことはない。ゆりという子を知っている、というだけなのだ。時貞は、今のゆりの気持ちに重ねて、言葉をくれた。

ここに来るまで、彼は、誰にも心を開かない、結構、ひねた子どもだった。相手が受け入れてくれると思うと、安心して心を開く、きっかけにもなるし、それが警戒を必要としない幼い子どもだったせいだろう。期せずして自分から手を伸ばし、相手を受け入れる、ということを知った。はじめにそんな感じだったから、後で接した大人たちへの、彼の感じ方も変わったのだろう。自分に、必要な人間関係を築くきっかけ。それを与えられた自分は、幸運だったのだと思う。幸せを自覚しているから、心を強くすることも、そこから成長することも出来たし、それをくれた人を、今は、自分でも守れるようになりたいと思っている。ふと、あの、雨水(うすい)とかいう少年も、そうかと、彼は考える。

「さあ、急ごう。だいぶ時間が遅くなってしまった。父上ももう、帰っておられるだろう。」

「どこかへ、お寄りになっていたの？」

「ああ。院の御所に・・・静か過ぎるくらいにお過ごしだから、たまには、お話相手をしないとね・・・。」

「ふうん・・・。」

時貞は、薫風たちも促して、大納言の待っている、室へと急ぐ。彼の室へと近付くと、灯火が明々と灯され、大納言が帰宅して待っているのだとわかった。

中へ入っていくと、いささか疲れ気味の大納言が、こちらを見た。ゆりが、ちょっと、小首を傾げる。席につくと、まず、時貞が口を開く。

「父上。ずいぶんお疲れのようですが・・・あちらで、何か難しいお話でもありましたか？」

「いや、何とすることもない。久しぶりの話相手だよ。どうも、長くなってな。退位なされた経緯が経緯だけに、こちらにも必要以上に言葉を選ぶから・・・。」

「そうでしたか・・・。」

無理やりというふうには、微笑をしている大納言に、時貞も、あえてそれ以上のことを訊ねない。大納言の訪問した院というのは、先々帝で、先々という、じいさん、というイメージが沸くが、間の先帝はその弟ですぐに崩御してしまったから、院は、大納言より、若いくらいな年齢なのだ。今の帝も、弟で年齢もあまり開きのない異母兄弟だ。皇族を母とする帝であった為に、孤立無援の状態、結局は臣下の、今の左大臣とその父に促されるような形で退位してしまった。出家されて、院の御所で静かに暮らしているはずなのだが・・・。院殿上を許された公卿たちも、事情が事情だけに、あまり寄りつかないので、院の御所は寂しいところとなっている。

ゆりが、つつつ・・・と、座ったまま、大納言の方に寄って行く。ささっ、と、両肩を手で掃った。娘の謎のしぐさに、大納言が「何だ？」という目をしている。

「父上。その法皇さまって、恨みつらみを蓄積された暗～い方なんじゃない？」

「・・・鬱屈した思いぐらひは持って・・・いらっしゃるだろうな。」

「ふ～ん。ずいぶん悪いものを貯めてらっしゃるようだけど、その院の御所って、気が沈む場所なんじゃない？行かないほうが好いわよ。」

「そういうわけにも行くまい。義理を欠いて、あまりに礼を欠いたら、やはり、それだけ、鬱屈していくのじゃないかね？心ならずも追いやられたお方をさらに、追い詰めるのは好ましいやり方とは思えん。別に、左大臣の尻拭いをしているわけじゃないがな。ゆりが、今日、口にしてた歌・・・。身のうちの鬼とは、敗者の方が強く、思っているものなのではないか？」

「慰められる方なら、いいけれど・・・。」

「・・・。」

大納言は、口を噤んでいる。彼自身も、忙しい身で、それほど、熱心に院の御所に参内しているわけではない。久しぶりに、訪れた、その場所は、いつにもまして暗い印象を与えた。

もともとが、郊外にあり、静かな場所なのだ。本来なら、公卿たちの邸宅が立ち並ぶ、左京の一角にでも御所を構えることが経済的にも可能だったにも拘らず、わざわざ、人の行きにくい場所を選んでいて、義理を欠かないようにしている、大納言ですら、人を拒むような姿勢を感じるのだから、訪問者が少ないのも、仕方ないことなのかもしれない。そんなことを思って、御前へと、建物を移動

していた時だ。

どこからか、香のかぐわしい香りが流れてきて、それを探し、彼は庭へと、視線を移した。

築山の濃い緑の近くを、清流が流れている、そのほとりを、黒髪の美しい女が佇んでいた。

綾衣の衣……。この院の御所に勤める女房だろうか。

さびしげな顔立ちの、その女の視線は、どこを見ているのやら、ぼう……。と、視線の定まらない感じに見える。

朋輩の女房らしき者が、現われて、何か囁くと、力なく、彼女にもたれるように、姿勢を崩す。支えられるようにして、建物の方へと消えて行った。

不思議に印象に残って、大納言は、近くにいた者に訊ねてみた。

「あれは……。その、法皇さまから、特別、局を与えられている方です。……。」

言いにくそうに、言葉を濁している。

「ああ。ご寵愛の方が、いらっしゃることは存じているが、もう随分長いのではないか。あの方は、若く見えたが……。他に新しく、お仕えなさった方なのか？」

どう考えても、二十歳前後。大納言の記憶の方は、退位して間もない頃から、身辺に侍している。出家後、まもなく、法皇が気に入った娘をそばに置いていると、噂になったから、それなら、いくら、若く見積もっても、三十路にはなるかと思う。

「いいえ。その方ですよ。いったい、おいくつなのか。いつも、ぼんやりと、人形めいたお方で、与えられた局に籠っていらっしゃるのですが……。出自が怪しい方ですからね……。」

「ほう……。まあ、下級貴族の娘だって、別に、法皇さまのお気持ちが慰められるなら、いいじゃないか。」

大納言は、わざと気のない返事をした。

内裏女房ほどではないが、やはり、それなりの家柄の娘しか、傍近くは、勤めることは出来ないはずだ。

「大納言さまは、お人が、よろしゅうございますなあ。」

耳打ちするように、声を潜めて教えてくれた。

「養女……。？」

それ自体は、珍しくないが、本当のところは、彼女を気にしてしまった法皇に連れてこられてしまったのだ。

どこかの朽ち果てた家に、ひっそりと生活していたのを見出されて連れてこられた。

体裁を取り繕うために、身分は、あとから考えられた。

「ふうん。なるほどなあ。」

「まあ、他にも怪しげな方は、出入りしていらっしゃいますが……。今、もっとも近くにいらっしゃる、姉小路どのも実は……。」

「なんだ。他にもいらっしゃるのか。」

「あのお方さまほど、続いたお方はありませんが……。ほとんどが、つまみぐい……。ごほんっ、失礼しました。まあ、その続いた例はございませんが。」

少ししゃべりすぎたと思ったのか、そこで話は途切れた。大納言も、一緒にいた女が彼女の世話をする者だ、ということだけ、聞きだして、話は終わりにした。

それから、気の重い話相手をつとめたのだが、退出の途中で・・・・。

呼ばれて、大納言はふと物思いから覚めた。

こちらを、見つめている、ゆりと、時貞とに苦笑して、言わなければならないことを口にする。

「雨水(うすい)のことなんだが・・・・確かめたいことがあって、そなた達、明後日は、この家にいてくれるか？」

「ええ、いいけど、どうして？」

じっと、大納言の視線が雨水(うすい)に注がれている。

「うん・・・・まだ、確かなことが言えん。確認してからだ。それと、今日はまた、随分な目にあったそうじゃないか？」

いきなり話が切り替わって、橋の上で鬼の行列に遭った経緯を話す。

京の姫たちを攫ったのは、あの鬼たちだ。

銀色の髪の子が首謀者か。

「だから、思い切って、長岡の方へ明日捜索に行ってみたいと思うんだけど・・・・。」

「それは、やめておけ。」

「父上。」

怒っている、ゆりの次の言葉を、大納言はわかっている、というふうに頷きながら、制す。

薫風に。

「それは、薫風どのが、上司にでも報告しておくがよかろう。確か、どこの家も、独自に陰陽師を雇ったりしていると聞くが、ほとんどが、陰陽寮の関係者だろう？」

「はい。おそらくは・・・・。否応なく、追い込まれたならともかく、私としても、横合いから人の仕事をとるような、あからさまな真似はしたくはありません。立てておかねば、ならない顔もございませんので。」

薫風が、こくりと頭を下げた。大納言は、ゆりに、厳しい目をむけた。

「そういうことだ、ゆり。この先、仕事を続けたければ、自らの分も量らねば、やりにくくなるぞ。」

「でも、怖い思いをしている方を、はやく助け出さなきゃ。」

「それほど、信用できぬ者ばかりなのか？」

「・・・・。」

薫風の方を見た。

「私の知る限りでは、信用の出来る者が係っております。我らが、真実に近づけたのは、偶然のなせるわざ。いや、呼ばれたとも言えるかもしれませんが。どんなに努力してみてもまったく甲斐がなかったことが、突然、期が熟してしまったり、たまに、そんなめぐり合わせというものがございます。いなくなられた方々の、安否を問う占いには、まだ、死を暗示させるものは出ていないということは、聞いています。してみると、今、その情報が分ったということは、こちら側に有利。姫君方の運のほうが勝っているということでしょう。」

大納言に答えながら、目は、ゆりを見ている。

ゆりは、はあっと溜息をつき、こくと頷いた。

「わかりました。」

その日は、大立ち回りで疲れているだろうからと、はやく休むように、と、ここで、この話は無しになる、はずだった。

諦めたはずが、結局、巻き込まれるようなかたちで、参加するとは。

さすがに、ゆりも思わなかった・・・・・・・・。

その日は、人目を忍び、日暮れ時に、ひっそりと市女笠の女が、大納言邸に入って行く。この屋敷に仕える女房が他所で、用を済ませ、戻って来たというふうには、門の所で待っていた女房と二人連れだって、流れるような動作で立ち止まることなく、庭を回って現れた。

「確かに、このお方です・・・よく、ご無事で・・・。」

通された室で、その女は、雨水(うすい)と対面すると、その手をとって、涙を流した。

「あの・・・。」

困ったように、雨水(うすい)が、口をぽかんと開けている。女は、雨水(うすい)の母に仕える者だという。

ひとつの笛を差し出し、雨水(うすい)の手に、握らせる。

「花鎮めの風、といわれる笛です。いつも、身に付けていらっしやった・・・。これが、寝殿の脇に落ちていて、その日から、あなたさまのお姿が、院の御所から消えてしまった。」

「・・・・・・・・。」

見事なつくりの笛だ。それでも、何も思い出せない、雨水(うすい)は、困っている。

そばにいた、ゆりが、不審げに眉を寄せて、ちらりと大納言を見た。

薫風も、その場に控えているのだが、彼も、じっと難しい表情で見ている。

「院の御所から、皇子が消えたのであれば、大騒ぎに、なりませんか・・・。」

控えめに、薫風が訊いた。御所に入入りしていた大納言ですら、知らない存在なんて、あり得るのか、と。

「正式に、認められたお方なれば、そうであろうが・・・。母君はあくまで、院の側仕えの女房。それも、随分お立場の弱いお方のように、院の御子でありながら、いるような、いないような、扱いだったとか・・・。院の御所ともなると、気位の高い、女房たちもいるからな。・・・・・・・・目立たぬように、過ごしていたらしい。新しい者の中には、素性を知らぬ者もいるそうだ。子どもにとっては、良い環境と言えん。」

「では、それに耐えられなくなって、家出したのかしら。その・・・だから、記憶を失ってしまって・・・。」

ゆりは、両手を胸のところで、ぎゅっと、握り締める。雨水(うすい)の母に仕える、というその女を見ている。大納言が、これから雨水(うすい)を送っていこうというのを、その女は、首を横に振った。

「いいえ。出来ましたら、こちらで、匿っていただきたいのです。あの女・・・いえ、失礼しました。姉小路どのと呼ばれるお方です。あのお方が、現われてから、院の御所は、前にもまして、瘴気の澁むところとなりました。阿子様の笛だけが、わずかにそれを祓えるものだったのです。きっとそれで、狙われたに違いありません。」

その言葉に、ゆりが頷く。

「そういえば、雨水(うすい)を拾った時、裸足だったし、あちこち着物も破けていて、それで、どこ

かのお屋敷に勤めていて、酷い扱いを受けていたのか、もしくは、継子苛めみたいなことを想像していたのだけど……。だから、あまり熱心に聞いてまわらなかったのよね。」

「そうですか……。」

「ところで、雨水(うすい)の母君は、どうしていらっしゃるの？」

「はい。とても、案じておられます。若君の笛の音が、あの場所を、……父君を引き止めておける手だてだから、戻って欲しい……と、おっしゃっていましたが、私は、こちらにいらっしゃったほうが、よろしいかと思えます。良い予感がしません。」

「そうね……。」

ちらり、ちらりと、薫風を見ている、ゆり。うんと、頷いて、薫風が雨水(うすい)に訊ねる。

「あの時の視線……、あの水無瀬と何か、繋がりがあろうな。雨水(うすい)。このまま、のらりくらしと、姿を隠して相手を避らすか。それとも、自分を狙っている者と対決して、晴れて堂々と道を歩けるほうがいいか、どちらを選ぶ？」

「これ以上、お荷物になるのは好みません。ですが、……対決するのを選ぶとして、勝ったら、やはり、もとの場所へ戻ることになるのでしょうか。私は、今の生活がいいのですが。」

「それは、後になってみなければわからない。そうか……では、手筈を整えて、院の御所に忍び込みましょう。」

身を隠し続けられるかどうかは、かなり、怪しくなっている。薫風の言に、雨水(うすい)が、覚悟を決めたように頷く。ゆりは、腰を浮かして何か言いかけたが、そのまま口を噤んでじっと、眉根を寄せて見守っている。薫風の様子から、まだ、彼が何か隠していると確信している。あとで確かめなくては……。そう思って、じっと黙っていた。

人も寝静まった時刻の真夜中に、まだ、灯りの漏れている部屋がある。さすがに、格子戸は閉められているが、真冬と違い、風通しよく簾で内と外を隔てているだけなので、近付けば気配が伝わる。薫風が中から顔を出した。

「何か、訊きたいことがある、という顔だな。ゆりどの。」

「あ、うん。中で起こっていることがわからないのに、乗り込むなんて、薫風らしくないと思って……。他に知っていることが、あるんでしょう？」

院の側に仕える怪しい女がいる、ということだけで、乗り込んで行ってどうしようというのか。

しかも、相手が物の怪の類であるとして、退治してしまった場合、後始末は、どうつけるのか。

院のお気に入りの女房がいなくなって、その夜、怪しげな人の出入りが、あったとしたら、人はどんなふうに関係するのか。院が自覚して、その物の怪を置いていた場合は、どうなるのか。世間から、忘れ去られたような方でも、院を相手に敵対するようなことになれば、一介の陰陽師ごときに関われる話なのか。

薫風とて、宮仕えの身には違いないのだ。疑問は、あるのに、薫風は、案外簡単に決断したようなのだ。

ゆりの懸念を聞いて、薫風が、へえ、という意外な顔をしている。

「立場だとか、考えるんだな。それなり、状況判断は出来るんだ。」

むっ、として文句を言いかける、ゆりを、首をすくめて、先の説明を続ける。

「帝と、東宮のもとに、連日、陰陽師たちが侍っている。呪いが放たれているのだ。結界を張って、警護している。」

「結界・・・？連日ねえ。そんな、呪いって、あるのかしら・・・怨霊なら、わかるけれど。」

「うん。普通は大きな術であれば、あるほど、破られた、その時に、反動が大きくなるだろうから、術者は死んでしまうだろうな。それが、こちら側に疲弊をもたらすほど、連日続く。」

「あ、それで、母上にもお声が掛かったわけか。」

薫風が、軽く首を縦に振る。

「ともかく、術の行われる、場所を特定するために、占いを行った、陰陽の助さまが、倒れられた。倒れる前に、不思議な啓示を、受け取ったのだが、それが、場所を特定出来る鍵になるのか、わからないものだった。最初に呟いた、水という言葉は、院の御所なら水辺にあるから、説明はつく。」

「あとは？」

「鬼、天后、あるいは天と后か、最後は意識が朦朧として口走っていたそうだから、正しいかどうかは、わからない。そして、反吟の卦が出ていた。」

「まさか、謀反・・・？でも、今の帝には、後継が、いらっしゃるわよね。」

「だが、男皇子は、お一人だ。他に、御位につかれる血筋の皇子は、いらっしゃらない。随分、遡って古皇子を探せば、別だろうけれど、帝が崩御し、東宮が薨去ということになれば、もう一度、今の院に、踐祚(せんそ)ということもあるのではないか。」

「・・・・・・・・。ねえ、雨水(うすい)どうなっちゃうのかしら。」

「大納言さまさえ、知らぬ顔をしてくだされば、連座することも、ないだろう。正式にも、認められてないのだし、物の怪に狙われなくなれば、大丈夫だろう。」

「何で、狙われていたのかしら……。笛のせいだけとも思えないけれど。」

「邪魔には思っていたら。おそらくは、謀反という決定的な言葉を聞いてしまったから、始末されなかったとか。」

「……………」

ゆりが頷く。雨水(うすい)の記憶が戻らない以上、断定できないが、推測は、まあ、そんなところだろう。

彼女は、廊下にぺたりと座り込んで、溜息をついた。自分は、どれだけ雨水(うすい)に手を貸してあげられるのか……。考えると、重たくなってくる心。ふと、風がそよいだ。わずかな、変化に気付き、顔をあげる。

こそ、こそこそ……。ほっかむりした、うさぎが、廊下を歩いている。ゆりと、薫風は顔を見合わせ、真白の近くへ、そっと、移動する。

むぎっ。耳をつかんで、持ち上げるゆり。

「うわっ。離せ。出て行くのだ。」

家出をしようとしていた。

理由を訊いてみて、ゆりは溜息をついた。薫風を見て言った。

「薫風が、この間言っていたみたいなこと……。予定調和、ってやつかしら。」

「院のそばの怪しい女に、大事な力玉を騙し盗られた、か。奪い返せば、いいのではないか？おそらく、その女が持っているのではないか？」

真白が、鼻をぴくぴくさせる。もう、何十年と経っている。奪われてから、方々探したが見つからなかった。ゆりに捕まるまでも、あちこち、めぼしい屋敷のまわりを嗅いでまわっていたが、やはり、それらしきものはしない。

「あの場所からは、匂いがしない。強いていえば、雨水(うすい)の笛のほうが、よく似た匂いがするのだ。」

「そう、じゃあ。院の御所の怪しい女のこと、知っていたの？」

「……………いけすかん奴だ。人を酔わせて、いい気になったところを騙し盗りやがった。人を妖言で惑わす奴なのだ。そういえば、妃の位に拘っていた。今度は、人間の王を狙うのか。」

「あんた、鬼の王様みたいなこというのね。……って、本当？へえ、ふううん……………」

まじまじと、真白を眺める、ゆり。そばで薫風が、いぶかしげな顔をしている。

「王様ということは、臣下もいるのかしら……………」

「いる……………。人間の臣下と違って、力に従うから、今は身を隠しているけれど、見つかったから……………」

「この間の行列か。」

「あの、銀の髪の奴は知らないぞ。他の奴らは、あいつに、従ってたみたいだな。」

「じゃあ、院の御所の女と何か関係があるのかな。」

「違うと、思うぞ？どっちかっていうと、悲しみで、鬼になった感じがしたのだ。」

「鬼も、元は人・・・か。理由は様々というわけか。」

薫風の言葉に、ゆりが真白を哀れみの目で見つめている。ぎゅっと、抱きしめる。

「真白、お前って、食い意地がはって間抜けなやつだけど、鬼になるほど、辛いことがあったのね。かわいそう。その念から、解放されるまで、私が手助けしてあげるわ。式神として良い事をしていれば、きっといつか、その念が浄化されるかもしれないわ。」

「うわあ・・・そんな何に怒っていたかもわからん、大昔のものなど、どうでもいいのだあ。離せっ。」

「・・・理由も、忘れちゃったのね。」

ゆりと真白の様子を見て、薫風がくすりと笑った。真白の目をのぞきこむように見て、請合う。

「害もなさそうだが・・・真白。ゆりどのならば、お前が、浄化される、きっかけをくれるかもしれない。お前たち、鬼は寿命というものがないから、ゆりどのが生涯を終えるまでに足りなければ、ずっと、主を変えていき、従うといい。ゆりどのが、良心的なやつのもとに託せるように、考えてもくれるだろうし。」

真白の赤い目がじっと、薫風を見ている。

「ゆりどのは、人の孤独に、手を差し伸べてやれるらしい・・・。」

薫風の言葉に、ゆりが首を傾げた。何か言おうとしたところに、真白が、くきくきと、首を動かして、思い出したように、呟いた。

「そういえば、雨水(うすい)も、家出するところを見たのだ。」

「ええ～！早く言いなさいよ。」

ゆりが、慌てて外へ駆け出す。薫風は、自分の式神を呼んで、使いを、どこかにやった。雨水(うすい)の目的は、院の御所。薫風も、ゆりの後を追う。

院の御所に着く前に、雨水(うすい)に追いついた。

雨水(うすい)の手をとって、ふくれっ面の、ゆりが言う。

「ちょっと、見くびらないでよ！危ないからって？私の術者としての腕を信用しないの？」

困ったような顔の、雨水(うすい)が、いる。ぎゅっと、握っている彼の手に力が入り、それに応えて、ゆりが頷く。

雨水(うすい)の顔に浮かんだ頼りない笑みに、ゆりが、にっこりと笑って応える。

「行こう。」

追いついて来た薫風を見とめると、雨水(うすい)を促して、院の御所へと向かった。

どこから、忍び込むか迷った。

さすがに、人の寄り付かないとはいえ、院の住まう場所、築地の崩れたところなどは、見当たらない。

薫風の式神、藤の蔓に塀の上に上げてもらう。ふと、下をみると、警護の侍が倒れている。降りようとしていた、雨水(うすい)とゆりを、薫風が止める。薫風の手から、白い小さな紙片が、風に舞うように飛び出す。

それからすぐ、風は戻って来て報告をした。短時間の間に、次から次へと、目の前に、小さな風の渦が起こる。

そして、また……。暗闇の何も無い空間の、どこからか、声が出て、中のように報告した。

門の近くでも、中でも人が倒れているという。

「来るまでに、使いを陰陽の頭(かみ)さまに出しておいた。おそらく、兵もこちらを取り囲むようなことになると思うが、それまで、待つか？」

「でも、手遅れになるかも……。この、微かに聞こえる読経の声……。何の呪いを行うつもりなのかしら。」

「自ら、鬼に転じて、呪うか……。」

薫風が呟く。

急いで、先へ進むことにした。ゆりが、真白に、門を開けてくるよう、命じる。

下へ降りた。瘴気の混じった、真夏の不快な暑さのような、空気が、三人の目を惑わす。

むっと、息が詰まるようだ。内は、禍々しい雰囲気支配されている。

不快な空気に眉を顰めて、進むうちに、いつの間にか、皆、はぐれてしまっていた。

けれど、この読経を中断して、瘴気を防げば、再会出来る、と。

捜すよりも、ゆりは、進むことを選ぶ。おそらく、雨水も薫風も進む方を選ぶ。同じだ……。

広い庭園を抜けて、やっと建物に、たどり着く。

ゆりは、ひらりと欄干を乗り越え廂の廊下に飛び乗る。

そのまま、角を曲がろうとしたところで、人とぶつかりそうになった。

「……！」

「阿子……。」

あえかな香りの袖に、ぎゅっと、抱きしめられてしまった。

童装束で、髪を後ろに束ねているので、暗闇でゆりが誰だか、わからないのだろう。雨水(うすい)の母だ、と、思う。

「違います。雨水(うすい)……って言っても、わからないか。えっと、友達のゆりです。彼も、ここに来ているの。この瘴気の中で互いにはぐれてしまっていて、けれども、この読経の主のもとに向かっているのは確かです。これを、祓わなければ。」

ゆりの言葉に、彼女は、そろそろと力を抜いて、顔を確認するように覗き込む。

どこか、寂しげな表情の人。何よりも、その頼りない瞳に自分が映っているのか、と、ゆりは不安になった。

「あの方をお止めしなければ……。呪いが完成してしまえば、鬼になってしまう。阿子の笛で、この瘴気を祓わなければ……。」

「祓うために、雨水(うすい)が必要なの？ちょっと、名前は存じませんが、お方様。あなたの阿子さまは、心配でないの？祓うと言ったって、これだけ、呪力があがってれば、祓うほうも危険なんですよ。いくら、素質があるからって、酷いじゃないですか。」

「……………」

大きく目を見開く姿が、ゆりの目に映った。微かに、はかなげに彼女が瞳を揺らす。

「阿子を心配してくれるのね。そうね、私は、何もしてやれない母だけれど……。でもね、ゆりさん、だったかしら……。あの方が、鬼に変じれば、あの子にも災いが降りかかるの。そうではなくて？」

「……ええ。だから、止めに来たんです。もう一人、仲間の陰陽師が来ているから、彼もそちらへ向かっているわ。この瘴気さえなければ、式を飛ばして、邪魔をするのだけど。」

瘴気が、どんどん強くなっていく。それとともに、ますます道に迷いやすくなり、普通の人間には立っているのさえ、やっとだ。ごほっ、ごほっ、と咳き込む。雨水(うすい)の母が、袪の袖を広げて、ゆりを近くに引き寄せる。

不思議なことに、少し体が楽になる。驚いて、見上げると、寂しげな微笑が頷く。うんと、頷いて、先を急ぐ。

迷うように、結界を張られていることは、ゆりにとって大したことではない。

けれど、この瘴気の中で、足を進めるのは、楽じゃない。

雨水(うすい)の母のおかげでどうにか、もっているけれど、ともすれば、足がもつれがちになる。

焦りで、額に汗が滲んだ。

と、その時。

清涼な風が、そよそよと、吹き、夏の暑さを祓ってくれるように、ゆりの体が楽になる。耳に、笛の音が届いた。

雨水(うすい)が、どこかで吹いているんだ、と。

ゆりは、耳をすませて、音の方向を探る。見れば、広大な院の御所の庭の小高く盛り上がった丘のような場所に、堂が建っている。そちらの方角からだ。

「大変！雨水(うすい)が一番、読経の近くにいるわ。急がなくては。」

ゆりは、雨水(うすい)の母の手を引いて、駆け出した。庭に降り立つ必要はなく、この場所から、渡り廊下で繋がっている。

ゆりを見つけた薫風が、彼女達の遙か後ろの方で、叫んでいる。

「ゆりどの！外は、今、勅命を帯びた、兵たちが囲んでいる。同行している陰陽の助さまが、しばらく足止めをして下さるが、長引けば、兵たちが踏み込んでくるぞ。」

今は、一時的に瘴気を押さえているが、盛り返したところに、兵たちがなだれこんで来たら、二次災害のようなことになるのもありうる。武器を持って、殺気立った者にどのような影響を与えるのか

計り知れないのも不安だ。

真白が、ゆりの斜め上に姿を顕し、同時に移動しながら、鼻を、ぴくぴくさせている。

「やっぱり、力玉の気配がするのだ。」

ゆりは、ちらりと真白を見遣ったが、足を留めている余裕はない。

堂へ、踏み込もうとしたとき、獣の唸り声のようなものが耳に入った。

「うおおおお・・・っ！邪魔をするな。その笛、うるさいっ！」

堂へ飛び込んだ、ゆりの目に映ったのは、僧形のおそらくは院とおぼしき、青黒く皮膚の変色したなかば、鬼と化した人の姿。耳を押さえて、うるさそうに体を振っている。目が、時々、狂を含んで、それでもまだ、正常な人の目との間を行ったり来たりしている。

「耳を塞がないで！しっかり、その笛の音色を聴いて！人であることを已めないで！」

ゆりは、声をあげた。

その声が届いたのか、院は、しばらく、落ち着いた目の色に戻る。

ぜえぜえと、苦しげな息を吐いている。

そこへ、ひらりと、垂領(ひれ)を靡かせて、古代めいた飛天女のような女が宙から舞い降りてきて、院にすぎる。

顔は・・・。やはり、あの水無瀬だ。

彼女は、飛天女のように身軽で美しいが、禍々しい雰囲気を纏い、目は常人とは違う光りを放っている。

院の心を、絡め獲るように、腕を首に巻きつけ、耳に何か囁く。ちらっと、ゆりたちの方に向けた視線は、忌々しいものをみる目つきだ。

「うおおおお・・・っ！」

再び苦しみだした、と、思ったら。

突然、院のまわりに青い炎のようなものが生じて、くわっ、と、目を見開くと、正面に立っていたゆりに、その怒りの炎が雷のように向かってくる。

印を結ぶ手が、間に合わないっ。

強い力に打たれる、そう思った瞬間、横合いから、雨水(うすい)が飛び出してくる。

雨水(うすい)は、自分の体を盾にして、ゆりを両手で、抱きしめるように、庇い、雷に打たれるのを遮った。力がぶつかった瞬間、衣があちこち破けて飛び散り、彼らは、そのまま床に倒れ臥す。

「ぐっ・・・！」

雨水(うすい)が、ぐったりとなる。

「雨水(うすい)っ。どうして、飛び出してきたの！しっかりして、やだ、死なないで。」

ゆりは、雨水(うすい)の下敷きになったままだ。

気が動転しているところに、また、次の二撃めが。

遅れて、堂に入って来た薫風が、式を飛ばしてそれを防ぐ。結界をつくり、ゆりの側へ行く。身を起こして、雨水(うすい)の意識を取り戻そうとしている、ゆりに、薫風が指示する。

「気を失っているだけなら、こちらを何とかするのが先だ。ゆりどの、自分で結界を敷いて、雨水(うすい)と自分の身を守っている。」

はっと我に返り、頷くゆり。涙が頬を伝って、雨水(うすい)の顔に落ちる。

「う・・・。」

目を開けた雨水(うすい)。

「雨水(うすい)。」

呼びかけられて。

雨水(うすい)は、自分の顔を濡らしているものに気付いて、ゆりの方に手を伸ばした。

「思い出した・・・。」

「え？何、しっかりして、大丈夫？」

「大丈夫。ゆりさまが、あの雨の日みたいに、笑って下されば、平気です。それより・・・。」

雨水(うすい)が目を細めると、ゆりの頬を濡らす涙を、自分の袖の端で拭う。

身を起こすと、院を見ている。

「思い出した。あの日、偶然、あの女と、父上の会話を聞いてしまったんだ。今上と、東宮を呪い奉ると・・・。止めなければ、ならない。」

雨水(うすい)を、ゆりが、心配そうにしている。

きっ・・・と、表情を引き締め、院を、見つめ、雨水(うすい)が口を開く。

「父上。目をお覚まし下さい。不本意に御位をおりた無念は、私には計り知れませんが、一時は、静かな生活を望まれたのではないですか？どうして、自分から、それを手放そうとなさいます。」

「うるさいっ。お前などに、吾の無念がわかるか。吾は、軽んじられているっ。」
本当に、そうなのか・・・？ただ、それだけが事実で、追い詰められたのか、と。疑問が胸に沸く。
雨水は、ゆりの父、大納言の言っていた言葉を思い出した。
「それは、ご自分から、人の入りを拒まれたからでしょう。何故、人のせいになさいます。それに、人を呪い、異形と化して、何となさいます。」
「鬼と化して、力を得れば、誰も吾に敵うものはいない。」
執着するものを手に入れることが、幸せなのか？否、誰にとっても不幸しか生まない、と。
雨水は、鬼と人の間をふらふら彷徨う、父院の瞳に、負けないよう、背筋を正す。
「そのような鬼と化したものが、御位に上がることを、天が赦しましょうか。鬼を主と仰がねばならない、民を哀れと思われませんか？もしも・・・もしも、思われないのでしたら、そんなお方に政を行う資格はございませんっ。」
「うるさいっ。うるさいっ、うるさいっ・・・。」
院の怒りと共に、青い雷のような光が、ぱしっと、飛んでくる。
ゆりは、急いで印を結び、雨水(うすい)のまわりに結界を敷いて、防御してやる。
今度は、間に合った・・・。

その間、薫風はどうしていたかというのと、式神を使って、院に取りつく女の鬼を引き剥がし、戦っている。その女の鬼一人でも、なかなか強く、勝負は膠着状態のようだ。
ふと、膠着状態の隙を縫って、院にすぎるように袖を引くものがある。雨水(うすい)の母だ。寂しげな顔を、いっそう影薄くみせて、それでも精一杯、引きとめようと見つめる。
「・・・・・・・・・・。」
「鬼となる者の苦しみは、鬼と化した後でも変わりません。それは、鬼の側で見ていた、私が、一番解っています。そんなことでは、苦しみからは、逃れられないのです。鬼と化してしまえば、人から忌み嫌われ、もっと深い孤独から、立ち直れなくなります。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
「どうか、どうか、お願いにございます。私や阿子を、少しでも愛しむ心が残っているなら、お聞き届け下さい。私たちを、置いて行ってしまわないで・・・・・・・・。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

その姿を、院は動きを止めて、じっと見ている。
彼を惑わす鬼の言葉は、今は、入って来ないので、苦しそうに呻いて考えている。
その様子を見て、ゆりが、雨水(うすい)に、そっと囁く。
「雨水(うすい)。父上さまに戻って来て、と、心を込めて、笛を吹ける？」
「・・・・・・・・やってみます。」

雨水(うすい)が、笛を吹く。

始めは、はげしく心を揺らす雨の音。

だんだんゆっくりと、大地にしみわたって、緑を潤す水のごとく、心の乾きに行き渡り、潤す。

音の波が、鬼になりかけた孤独を優しく癒していく。

吹きながら、いつのまにか、晴れた空に、緑のつやつやした満たされた景色の中で、手を差し伸べてくれた人を、雨水(うすい)は、思い浮かべていた。

初めて、目線を合わせてくれた人、笑ってくれた人に、素直に手をのばしていた自分。

自分から、手をのばすことも、必要なのだ。

自分を取り巻く世界が、急に、色鮮やかできれいなのだ、と、思えた。

そんなふうに、誰かが手を差し伸べてくれるように。

差し伸べられている、手を見逃さないように。

・・・そして、取るべき、手を間違えないように。

願いながら、曲を繋いでいく。

戻って来て・・・。

そんな思いが通じたのか、鬼に変わりかけた院の姿が元に戻り始めている。

雨水(うすい)は、ますます、人の心に染み入るような音色を響かせた。

笛を吹く雨水(うすい)の横に、今まで、ずっと、傍観していた、真白が立って、じっと、それを見つめている。しばらく、考えていたが、とてとてと、ゆりの方に寄って来て言った。

「今なら、力が出せそうなのだ。」

「力玉って、あの笛なの？」

「たぶん、一部があれに変えられた。ほんの一欠片だから、気配も薄くてわからなかった。それに、残りも近付いているから、十分、力が出せるのだ。もとの姿に戻って、あの鬼を押し返すことが出来る。命じよ。主。」

真白は、膠着状態の、薫風と戦っている鬼を、指し示している。

「わかった。真白、お願い。元の姿に戻って、あの鬼を取り押さえて。」

真白のまわりの空気が一変し、ゆらりとその姿が滲むと突然、天井につくかと思うほどの大きな鬼の姿に転じた。

そのまま、ひらりと女の鬼のもとに寄って行く。

女の顔が一瞬、恐怖に凍りつく。

真白は、容赦なく鋭い爪を持った手で、これを切り裂き、床に叩き伏せた。

なお、それを食おうとしていたところに、ゆりの声が掛かる。

「真白。駄目っ！力が出せなければ、いいの。あなたの、罪を増やしては駄目よ！」

「む・・・・・・・・・・。」

真白は、仕方なく、その女の鬼の力の源を、吸出し、ぼうっと人玉のように光る玉のようなものを手にしている。それだけを、ごくりと、飲み込んだ。

あとは、床にぐったりとなった、異形と化した女がいるだけだ。

院も、元の人姿に戻ると、体から、力が抜けて、ふらりと膝をついた。雨水(うすい)の母が介抱している。

外が、ざわざわとしてきた。

人が沢山取り囲む気配がして、何人か弓と、刀を携えた者たちが、入ってきた。

それを掻き分けるように、大納言が、陰陽の助と数名の陰陽師たちを伴って、入ってきた。

「御前に踏み込む失礼、どうか、お許し下され。許しを請うにも、門からここまで、人が皆、倒れていました……。勅命で、ございます。そちらの、異形の者、帝と東宮のお命を狙い、世間を騒がせたものとして、捕縛せよとの命が下されました。引き立てていくことをお許してください。どうか、庇い立てなさいませぬ。抵抗めさるなら、先代とても、謀反に連座せられるものとの仰せでございます。」

「大納言、そなたが来たのか・・・・・・・・。」

院の言葉に、大納言が、ゆっくりと膝をついて、礼をとった。

「本来は、検非違使の役目ですが、ここは、院の御所。せめて、御前にて、お話申し上げるのは、出来れば高位の者がよかろうということと、右大将をつとめ帝の身をお守りする責任者の一翼を担っているということで、私にと、ご下命がありました。災難に見舞われただけであろうから、できれば、院に失礼のないように、配慮せよとの仰せ……。私も、役目とはいえ、こういう形で、御前に伺いとうはありませんでした。」

「・・・・・・・・その者、連れて行け。」

院の言葉を聞くと、大納言は連れてきた兵たちに、指示を出す。

まず、院を室内にあった几帳の影に隠し、異形のを捕縛して連れて行く命を下す。

「陰陽の助どの。兵たちに付いて行って、彼らの安全を図ってくれ。」

「畏まりました。それから、恐れ多いことながら、院におかれましては悪い気を吸って、随分と衰弱が激しいご様子。こちらへ連れてきた者たちのなかで、この桔梗と申すものを置いていきます。差し支えなければ、その異形を斃した、陰陽師たちにも手伝わせて、あとを任せることにしましょう。」

「そのように・・・・・・・・。」

大納言が頷くと、兵たちが素早く動き出し、異形の女を連れ出した。

辺りが静かになる。御所内で倒れている者も、すべて運び出されると、兵たちは、一旦外へ出て、警護の者を堀の外に残して、ほとんどが去って行った。

御所内には、倒れている人が運び出され、世話をする者もいなくなった為に、院を、どこかの邸宅に移す手筈になっていた。だから、まだ、夜の闇の中で、一両の車が大急ぎで、門の中へ入って行くのを、堀の外を守っていた、兵たちは、ほっとした思いで見つめていた・・・。

瘴気も治まり、雨水(うすい)の笛の音に浄化された堂内で、横たわる院と、それを見守る者たち。桔梗と、薫風が手を尽くして、手あてをしている。

ゆりは、雨水(うすい)の傷の手当をしている。向こうを気にしながら、いつも、身につけて持ってきている、塗り薬を出して塗り、水干の下の単衣の袖を切り裂いて、手際よく巻いている。

「雨水(うすい)。体は、だるくない？」

「平気です。途中までは、結構くらくら、力が入らなくて、無理していたんだけど、笛を吹いていたら、何だか、急に楽になって……。」

そばに、うさぎの姿に戻った真白が、ぽすっと、座った。

「それは、その笛の力のせいだ。雨水(うすい)だから、引き出せた力とも言えるだろう。」

「笛の……。そういえば、これは、真白の物なのかな。」

雨水は、笛を真白に差し出そうとする。

「人の命は短い。貸しておいてもいい。我は式神の仕事で忙しい。鬼たちの王に戻るのも、今はつまらないし、かまわないのだ。」

雨水(うすい)と、ゆりが顔を見合わせる。

「ありがとうございます。お借りします……。」

こくん、と。真白が頷くと、今度はゆりを見た。

「今日は、おもしろいものを見た。鬼になりかけた者が、引き戻された。お前のそばにいたら、また、興味深いものが見れそうだから、しばらく、式神としていてやる。あ、ただし、おやつは、ちゃんと寄せよ。」

「おやつ……。」

一番は、それが目当てではないの……と。疑いたくなったゆりだ。まあ、ここで、それを問うてみる必要もないことなので、敢えてつっこまない。傷の手当を終えて、ゆりも雨水(うすい)も、院が横たわっている方へと移動する。

「桔梗。院のご容態は……？」

訊ねる大納言の声に、桔梗が微妙な表情をしている。

「ずいぶん、瘴気がお体を損ねているご様子。このまま、安静にして、回復を待つしか方法がありません。……雨水(うすい)は、院の御子でしたのね。こちらへ。」

桔梗は、雨水(うすい)を差し招いた。院の傍に座らせて、片方の手を握らせた。

「時々でいいから、その笛を聴かせてあげてください。今度のことは、心の病が発端だから、できれば、御心に負担がかからないように、体を癒すことに専念できるように。」

「はい……。いろいろ、ありがとうございました。」

「いいえ。ゆりも、同じ年頃の子と親しくする機会はあまりないことだから、よいことでした。いつも、大人相手ばかりだから、気ばかり強くなって……。同じ目線というものも、大切なことですよ。」

「はい……。」

雨水(うすい)の握っていた手に力が入ったので、院の顔を確認める。目を開けているが、よく見えていないようだ。

「大納言は、そこにいるか。」

「はい。」

「吾は、これから、どうなる。遠国に配流か・・・それとも・・・。」

「少なくとも、御身をどこかへお移しして、静養していただく必要があります。あの、異形のものについては、こちらに出入りしていたとして、あとで、高位の者が、二、三、質問に参るでしょうが、先代の院と、反目というのは、上としても避けたいようで・・・治世に汚点を残したくないでしょうからな。怪しいものを出入りさせてしまったと、院が先に、後悔なさっている旨をお知らせしておけば、事は丸くおさまる。今上も、あなた様を気の毒に思いこそすれ、追い詰めることはなされますまい。」

「それは・・・。」

「臣としての勤めは、そのことを院にそれとなく、伝えておけということまでです。・・・ここからは、私人の独り言として、お心の隅に留めておいて下され。」

「・・・・・・・・・・。」

出来れば、もう追い詰められるようなことにならないように、言葉をつむぐ必要があると思う。上手く伝わるものかどうか、大納言は、院の様子を見ながら、一呼吸おいた。

身動きすることもなく、じっとしているから、その場は衣擦れの音すらしない。

しんと静まりかえった中で、院の耳に、大納言の落ち着いた声が届く。

「御自ら、孤独になられますな。差し伸べられた手をお取りなさい。例え、それが、追い詰めて怨霊になることを防ぐための腹づもりであっても、御身の窮地を救うことには変わりありませんまい。人というものは、それぞれ、自らを守って生きているもの。ですから、手を差し伸べるにしても、人様々、自ずと限界もありましょうし、皆、それぞれの生を懸命に生きていることに思い至ってくださいませ。」

「・・・・・・・・・・。」

起こしてしまったことはともかく、踏みとどまった、ということは、自らの選択であることに違いない。どんなに助け手があっても、選ぶか選ばないかは、自らの意思によるものだ。それは、やはりすごいことなのだ。人としての誇りを失っていないのなら、落ち着いて後に、ことの罪科についても思い至ることがあるかもしれない。

孤独な心が、抛り所となるような、誇りを、思い出させるために。

「御位にあられた時は、賢君であられた。これまで、臣として、諫言を申し上げなかったことを、反省しております。偽善と思われましようとも、そこに、一片の真心も含まれないということはお詫言いますまい。あまり、思いつめなさいませんように。賢君であられた時を汚さぬように・・・願うばかりです。」

「あい解った・・・。」

院が話を聞いている間中、雨水(うすい)は、握っている手に何度も力が入ったのが分かった。

「……御所内の者たちは、どうなった。」

「瘴気に充てられて、倒れていましたから、運び出しましたが……何名かは、残念ながら、息絶えておりました。」

院が目を瞑る。

「そうか……。すまぬが、懇ろに弔ってやってくれ。」

「承知しました。」

あとは、院の迎えを待つばかりとなり、しんとしたところに、突然、牛車の車輪が、激しく地面の上を転がり、きしむ音が、堂に近付いてきた。

ぼんと、大きな風が、堂の格子戸のひとつを破戒して、銀の髪の鬼が乱入してきた。

桔梗も、薫風もゆりも、身構える。だが、そばにいた雨水(うすい)の母の一言に、攻撃を思いとどまる。

「母さま……。」

その言葉に、銀の髪の鬼は反応して、よろよると、雨水(うすい)の母のもとに寄ってきて、抱きしめた。

「おお、姫じゃ。姫がいた。この手に戻ってきた。無事でよかった。お前たちが、姫を攫ったのかっ！」

鬼が、目を吊り上げて、その場にいた者たちを睨みつける。今にも、攻撃に出そうだ。

雨水(うすい)の母が、両手を広げて皆を庇う。

「お止めください。この方達には、お世話になって、助けていただいたのです。それに、ここには、私のお慕いするお方も、大事な阿子もおります。」

「どうということじゃ……。」

「……皆さまにも、事情をお話ししなければなりませんまい。」

銀の髪の鬼は、もとは身分の高い家の生まれだった。

政争で、たまたま破れた側の夫を持つ妻は、勝った側の実家という立場で、そのまま寄り添うことが叶わなくなった。夫は、失意の内に亡くなったのだが、それよりも、寂しさと、周囲への恨みとで孤独になった女は、鬼と化して、まわりの者を赦さなかった。

結局、縁につながる者が次々と亡くなり、気がついたときには、一人、朽ち果てた家に呆然と佇んでいた。身ごもったまま、鬼と化した女は、人の子を産んだ。

そこで、はじめて、後悔をしたのだ。

鬼の身で、人の子を育てることなど出来ない。考えたすえ、人の女に変装して、通りを歩き、人のよさそうな老いた僧に託そうとしたのだ。

ところが、正体を見破られ、命の危険にさらされた鬼は、あっさりと命を差し出すかわりに、この子を助けてくれと、地に臥した。

老僧は、その姿を哀れんで、鬼に、ふところから出した赤い玉を渡して、一つ知恵を授けてくれた。

「鬼というものは、そもそも後悔はいたさん。すでに、人の心を無くしているからじゃ。じゃが、お前様は、中途半端に人の心を留めてしまったようじゃ。ところで、これは、怪しげなる妖術を使うものから、取り上げたものじゃが。強い力があるから、半端な鬼の瘴気に当てられることもない。これを、子に持たせて、自身で育てるがよかろう。そうして、もう一度、自らの過ちを見つめるのじゃ。寂しさに負けたり、人を恨むことばかりでは、良い子は育たん。人を愛しむことで、人の心を思い出すことが出来るかもしれぬ。この子に手伝ってもらおうのじゃ。よいか、鬼の心に支配されては、この子は生き長らえることは出来ないぞ。」

そう言って、去って行った。銀の髪の鬼は、言われたとおりに、朽ち果てた家でひっそりと、子を育てて生きていた。

ところが、ほんのちょっと、留守をした際に、大事な姫がいなくなった。

その話を聞いて、薫風が疑問を差し挟む。

「では、あの、唐車など、鬼の子分たちは？」

「あれは、玉に惹かれてやってきた。獲られそうになったので、一部をその笛に変えて、目くらましをかけ、姫にもたせ、残りは飲み込んだら、今度は、鬼たちが従うようになったのだ。」

「飲み込んだ・・・。」

そんなことは銀の鬼にはどうでもいいことらしく、答えはしたものの、気がかりな我が姫の方ばかり、見つめている。

「それで、姫。今まで、どうしていたのか・・・。」

院に連れてこられた話をするとまた、怒り出すかもしれない。

居合わせた人の間に、緊張が走った。

「時々、散歩に出かけると、いつも、見かける人がいたの。いつの間にか、親しく話をするようになって・・・。」

けれど、自分の身の上を考えれば、ずっと傍にいられるような方ではない。

そう思って、そのうちそこには、行かなくなっていたのだが、それを探し出して、連れ出したのが、院だった。すべてを打ち明ける勇気がなくて、そのままずるずると、ここに居続けてしまったのだ。「はじめに、打ち明けていれば・・・このようなことにはならなかったかもしれない。もしかしたら、あの鬼は、その笛の鬼の気に惹かれて、引き寄せてしまったのかもしれないもの。」

悲しそうな雨水(うすい)の母を、銀の髪の子分がおろおろしながら、抱いている。

「母さま・・・。その老僧の言葉の続き。慈しみ育てるとともに、必ず、許しの心を取り戻せと、仰せがあったはず。それでも、容易に人には戻れないかもしれませんが、そうなることを願っています。」

鬼と化す程の孤独・・・。

孤独と化してしまう理由は、様々だが、それらと折り合いをつけて生きていくことが必要だろう。その方法も人様々だが、本来どんな人にも備わっているはずの能力だ。

だが、己の姿も、まわりのことも正しく見ることがかなわないのが鬼。

鬼になってしまうのは簡単だが、その者は永劫に浮かばれないのではないか。・・・・・・・・・・。

雨水の母がじっと、哀しそうに、銀の髪の子分を見つめていた。

その銀の髪の子分の頬を、雨水(うすい)の母の手が撫でる。

鬼は涙を流さないが、まるで、そこに熱い滴が流れているように、優しく両手が包む。

娘の手の温くもりを、銀の髪の子分は感じた。

「・・・・・・・・・・。考えてみる。」

銀の髪の子分が抱いていた娘から手を離すと、そろそろと外へ向かう。

「待つのだ。」

真白が呼び止める。

「その力を持ったままでは、よけいに元に戻りにくいだろう。それは、俺様のものだから、返してくれ。」

「返す・・・どうやって？」

真白は、銀の髪の子が抵抗しないのをみとめると、すいっと、手を彼女の喉に翳した。赤い靄が出てきて、それがだんだん大きな玉に変じていく。少し欠けた状態の大きな玉になると、真白はそれを、また、数珠に変えた。ゆりに、ぽいっと投げて寄こす。

「これは、主が持っているといい。近くにないと、式神としても、ものの役に立たないから、ちょうどいい。それから・・・。」

もう一度、手を翳すと、真白の目が赤く光る。

「とりあえず、代わりの気配をつけておいた。戻っても、鬼たちを押さえることができるぞ。狙われることはないのだ。」

銀の髪の子は、ぺこりと真白に頭を下げて出て行った。

帰り際、院を惑わせた女の子に唆されて、京中の姫を攫って隠している場所を教えてくれた。

ここに、彼女の探していた娘がいると分っていれば、そんなこともなかったのに、と、ぽつりと言った。

桔梗が、式神を通じて、姫たちの居所を仲間に伝えたが、院の落ち着き先まで付き添って、その先は、薫風に任せると、ゆりを連れて、仲間のもとへと、急ぐ。

攫われた姫たちを救い出すことことに、成功したけれど、わらわらと、あふれ出る鬼たちの後始末に手をやく、仲間の手伝いをするためだ。結局は、どこからか現われた銀の髪の子が、それらを引き連れて、撤退してくれたので、それほど、手もかからず、この一件は終わった。

世間を騒がせた事件について、人々の噂も聞かれなくなった、冬の今日この頃・・・。

大納言邸の西の対の自室で、ゆりは欠伸をかみ殺しながら、巻物を広げていた。

そばで、まとのが、わくわくしながら、それを覗き込んでいる。

絵巻物として描かれたその物語は、優雅な和歌などを含み、姫君たちが喜ぶ、恋の物語だ。

「ねえ。そろそろ、いいでしょ？姫君ごっこ・・・。」

ゆりの願いに、まとのが、ぷっと頬を膨らます。

「駄目です。あれから、忙しい、とかで、お仕事ばかり熱心で、ずっと、私とのお約束をお忘れだったんですから・・・。」

「・・・・・・・・。」

「それに、明日は、お友達に、結婚のお祝いの言葉を伝えにいかれるのでしょうか？あちらは、きちんとしたお姫さまなんだから、形だけでもきちんとしないと・・・。あっ、いけない。今、何時ですかね？」

「さあ？冬だし、日が沈むのは早いから、そろそろかしら・・・。」

「大変、ゆりさまの、お召し物を取り替えないと。」

「いいわよ。まさか、ご飯食べる為に着替えるとかじゃ、ないわよね。」

「違います。時貞さまが、今日、お戻りの折に、友人を連れて来るから、妹を、ちゃんと姫らしく着飾らせておいてくれって、言われていて・・・。早く、ここを取り片付けなくちゃ、紫野さんに叱られちゃう。」

まとのが、慌てて巻物を片付けると、計ったように、紫野が、やって来た。

重い衣の入った箱を、紫野に、従って持って来た、侍女たちが箱を置くと、紫野は、彼女たちを退らせる。

紫野とまとのに、着付けられながら、ゆりは大人しくしている。まとのが異常に張り切っていてこわい。

着付け終わると、紫野は、開けっ放しになっている、格子を下ろし、廂からの入り口になっている所の御簾を下ろして、内と外を隔て、設(しつら)いを整える。

着飾る意味ないやん・・・と、心の中で、ゆりがつつこんでいると、薄暗くなって来ていた室内に灯火を灯し、ゆりに扇を渡しながら、注意をうながした。

「外が暗くなってしまえば、灯りにこちらの姿が丸見えになってしまいますからね。お作法として、お顔は、必ずお隠し下さいませ。」

紫野と、まとのが隣りに座って、控えている。

その状態で、時貞がやってくるのを迎える。あいからず、上品な物腰だ。

御簾をあげて中へは入らず、廂に陣取ると、彼が連れていた人物も、同じように隣に座った。

御簾際に座っているわけではなく、外の方は薄暗いので、よほど目を凝らして見てみなければ、どんな人かはわからない。

「今日は、大人しくしているね。感心感心。友人に可愛い妹を自慢しようと連れてきたよ。」

「……………」

なんと行ってやろうか、と、迷っていた。

今日は、友人を連れてるので、直接声をかけないほうがいいのだろうか、それとも、いつものように、はきはきと答えてしまおうか、と、ゆりは、考えていた。

ちょいちょいと、目を大きく見開いたまものが、ゆりの袖を引いて、外を注視している。時貞の友人を見ている。

ゆりも、じっと見てみると……………。

「雨水(うすい)……………」

雨水(うすい)が、狩衣姿で座っている。元服して、背に垂らしてくくっていた、髪を切り、髻を結って、烏帽子を頭に乘せている。

雨水(うすい)が、ゆりの声を聞いて、懐かしさに目を細める。

ゆりは、ささっと御簾をあげて、外へ姿を現してしまった。

時貞が、その様子を見て、苦笑した。

「やれやれ、困ったものだ。今日は、親王様として紹介するか、陰陽寮につとめている陰陽師として紹介するか、迷っていたのだが、後者だな。」

「え。どういうこと？」

確か、院の暴挙を止めた御子として、帝より、特別後ろ盾がないままではあるが、親王宣下がおりました。彼は、表向きは、今は、ずっと臥せっている父の院の静養を、世話するために、裏の理由は、身柄を責任を持って預かるということで、表の官職につくことはないけれど、生活が保障されていた。

そこまでの、事情は、ゆりも父から、聞かされたので知っていた。

「ええ。顔を知られることもありませんから、二重生活でしょうか。本当は、一介の陰陽師として、父の贖罪を含めて、人の役に立ちたいと願ったら、このような処分がおりましたのです。一応、出歩く時は、薫風どこの従兄弟ということで、彼に教わって、陰陽師になるために勉強しています。普段は、まだ、学生です。」

「それは……………いいこと……………って言って、いいのかしら……………」

「こうして、雨水(うすい)のままで、ゆりさまにも、会えますしね。」

元服して、様が変わったせいか、雨水(うすい)は、同じように笑っていても、前より大人びて見える。

ゆりは、瞬時戸惑いを覚えながらも、すぐに、気を取り直して言った。

「そうだ。ねえ、笛を聞かせてよ。雨水(うすい)の音色が聴けなくなって、ちょっと残念だったもの。」

「それなら、箏をゆり姫が、あわせて弾いたら、いいのじゃないか。」

時貞が、言い添えて、箏が運ばれ、ひととき、美しい音色が邸内に響いた。明るい音にみちた二つ

の響きは、いつまでも、追いかけて楽しむように響いた
おわり

やらへども鬼

<http://p.booklog.jp/book/25955>

著者：みん兎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokinoizumi3/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25955>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25955>